

1月3日

## 「変わらない御言葉」

I ペテロ 1:22-25

武安 宏樹 牧師

私たちがなすべきことの中で、最も大事なのが神ご自身との交わりです。主日礼拝を厳守しつつも、年のはじめに、デボーションでも聖書通読でも、短時間で構わないので継続できる目標を立てて実行すると、自信になります。

今日の箇所は聖化の働きについて語られています。「献身＝霊的な礼拝」と昨年は学びました(ローマ 12:1)。聖霊の働きにより私たちは救いの招きを受け、悔い改めに応答し、新たに生まれ変わりました。聖化は信仰決心の瞬間から始まり、以降も神の愛に応答し、日々の献身で神との交わりは深まります。肉の弱さを覚えつつも、悔い改めと赦しの確信で聖霊の満たしを受けます。その過程で砕かれながら、陶器師なる主は私たちが造りかえてくださいます。肉に死に、霊に生きる。「新しく生まれた」とは既に起こり、継続する意です。

面白いのは、「変わらない御言葉」に「変えられていく自分」がいることです。内なる新生体験に Yes と応答する時に、私たちは変えられます。聖書がただの書物でないのは、聖霊の息吹ゆえです。カルヴァンは「内的照明」と呼びました。聖書は私たちの人格を教導し、聖霊は正しい適用を導きます(II テモテ 3:15-17)。表に出ない聖化の働きを悪魔は私たちの肉の弱さに訴えて、御言葉の交わりから遠ざけようとしますが、苦難は決して無駄に終わりません(イザヤ 55:11)。忍耐こそ練られた品性を生みます(ローマ 5:4)。「荒野の 40 年」は御言葉に生きる訓練のため必要な回り道であったとモーセは述懐しています(申命記 8:3,5)。乱気流の如く混迷を深める時代の中で、変わらない御言葉に目を開かれて、地に足を着けた信仰生活、聖化の生涯を全うする一年となることを願います。

1月10日

## 「先駆者ヨハネ」

マルコ 1:1-8

武安 宏樹 牧師

今週からマルコの福音書の連続講解に入ります。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)の中で最古といわれ、主イエスの公生涯の実況中継を見ているかのようです。1節の書き出しは本書の目的を示し、ここから福音宣教がスタートします。

2節はマラキ 4:5 の引用です。神殿完成後の霊的弛緩に迫り来る主の日の警告。エリヤの再来(Ⅱ列王 2:11)は前兆です。「エリヤ=ヨハネ」と言っても嘘ではありませんが、ヨハネは否定します(ヨハネ 1:21)。彼らしい謙遜さです。ヨハネは主の訪れの「地ならし」を行う「前座」で充分だと考えたのでしょうか。最後の預言者として彼の働きは「神に心を向けさせる」(マラキ 4:6)ことでした。

不毛な荒野での質素な生活を通じ、御声を聞くことに専念していたヨハネ。彼の生き様と力あるメッセージに、「全国の人々」が列を成して応答しました。ヨルダン川はナアマンのきよめで有名ですが(Ⅱ列王 5:14)、外面的なきよめのために何回も行うのではなく、ヨハネのバプテスマは1回限りのもので、異邦人だけでなくユダヤ人も受ける点が、従来のバプテスマと異なります。しかしそれこそ神の要求される、罪からのきよめと心の割礼に他なりません。

自分のことではなく「私より力のある方」の到来を叫び続けるメッセージ。世に生まれたのは彼が先ですが、キリストの先在性から言えば些細なこと。加えて「くつのひもを解く」価値もないと、自らの卑しさを強調することで、キリストの偉大さと聖さを賛美します。水によるきよめだけでは不完全で、聖霊によるバプテスマの祝福を通し、新しく神の御心を行う者とされます。ヨハネの「あとからおいでになる方」により完成されます(エゼキエル 36:25-27)。

「前座」を心から喜んで全うしたヨハネ。主イエスも彼を評価し(マタイ 11:11)、斬首による殉教を悼みました(マタイ 14:13)。群衆までも彼に一目置きました。御言葉に生き、御言葉を叫び続け、ついには御言葉ゆえに殉教した彼の大胆かつ謙遜な信仰は、終わりの時代に生きるキリスト者の前に偉大な模範です。

1月17日

## 「キリストの受洗」

マルコ 1:9-11

武安 宏樹 牧師

バプテスマを受けていたヨハネは、救い主の出現までの前座に過ぎないという謙虚な思いが全てでした(7-8節)。その場を譲ろうとした瞬間、まさか御自ら受けられるとは！しかし主イエスの返答は意外でした(マタイ 3:14-15)。神の子として相応しいか否かではなく「人間と同じようになられた」(ピリピ 2:7)ためにへりくだられたのです。ヨハネは納得して、バプテスマを受けました。

最近の教会では浸礼(バプテスト派など＝新生を強調)と滴礼(長老派系など＝三位一体を強調)の2つの方式が主流のようです。当教団は教会によります。主イエスが水から上がられた瞬間、天が裂けた。これは尋常でない光景です。使徒の働きには殉教のステパノや獄中のペテロに天から臨在が顕されます。私たちが天に向かって善行を積み上げ、神の愛顧や救いを獲得するのではなく、神の方から天を開いて聖霊を注いでくださった。主イエスが長兄として受け、私たちに救いの賜物である聖霊を分与してくださいます。11節は「神の子」と「主のしもべ」の預言の合体です。「神の子で人の子」であるバプテスマを通し、豊かな恵みを受けて、私たちは神の律法を喜んで行う主のしもべとなります。

「聖霊のバプテスマ」の解釈については、新生の時か後の体験か教派により様々ですが、聖書はキリストを受け入れた時に聖霊は降られ( I コリント 12:13)、以降私たちの信仰生活の上に継続的な聖霊の満たしを勧めます(エペソ 5:18)。それだけでなく弱さや苦難の中で求める時に、特別な聖霊の傾注があります。体験の有無は周囲との比較ではなく、益々主に力強く仕えるための恵みです。

「キリストの血と霊によって洗われるとは、どういうことですか？」

「それは、十字架での犠牲においてわたしたちのために流されたキリストの血のゆえに、恵みによって、神から罪の赦しを得る、ということです。

さらに、聖霊によって新しくされ、キリストの一部として聖別される、ということでもあります。それは、わたしたちが次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためなのです。」(ハイデルベルク信仰問答問 70 より)

1月24日

## 「荒野での訓練」

マルコ 1:12-13

武安 宏樹 牧師

荒野での誘惑の記事は並行箇所(マタイ 4章/ルカ 4章)が詳しいですが、本書では、主イエスの受けられた「バプテスマ→聖霊→試み」の流れを追うことができます。「サタン=敵対者」です。超自然・霊的存在ですが、神によって力は制限され、最終的に敗北します。主イエスが勝利されたので、私たちは信仰生活を妨害する悪魔に立ち向かい、勝利を得ることが約束されています( I ペテロ 5:8-10)。以下の信仰問答の主の祈り「我らを試みに遭わせず～」解説に教えられます。

「わたしたちは自分自身あまりに弱く、ほんの一時立っていることさえできません。その上わたしたちの恐ろしい敵である悪魔やこの世、また自分自身の肉が、絶え間なく攻撃をしかけてまいります。ですから、どうかあなたの聖霊の力によって、わたしたちを保ち、強めてくださり、わたしたちがそれらに激しく抵抗し、この霊の戦いに敗れることなく、ついには完全な勝利を収められるようにしてください、ということです。」

(ハイデルベルク信仰問答問 127 より)

「最も賢く正しく恵み深い神が、さまざまなきよく正しい目的のために、わたしたちが試みによって攻め立てられ、惑わされ、一時は囚われの身に引き行かれるよう、物事を指図されるかもしれないこと、サタンと世と肉とが、わたしたちを強引に引き寄せ、わなに陥れようと身構えていること、またわたしたちが罪の許しの後でさえも、自分の腐敗と弱さと警戒不足のために試みられがちであり、進んでわが身を試みにさらそうとするだけでなく、自分自身ではそれらに対抗し、そこから立ち直り、それを利用することができもせず、欲もしないで、むしろその力のもとに放置されるにふさわしいことを、認めつつ、次のことを祈るのである。すなわち、神が世界とそこにある一切のものを支配し、肉を従わせ、サタンを抑圧し、万物を指図し、すべての恵みの手段を与えて祝福し、わたしたちを促してその使用に注意深くらせて下さり、その結果、わたしたちと神のすべての民が、神の摂理によって、罪に誘われることから守られるようになること、あるいはたとえ誘われても、みたまによって、試みの時に強く支えられて立つことができるようにされ、あるいは倒された時には、再び起こされてそこから立ち直り、それをきよく用い利用することができるようになること、わたしたちのきよめと救いが完成され、サタンがわたしたちの足の下に踏みじられ、わたしたちが罪と試みとすべての悪から、永遠に全く解放されるようになることである。」

(ウエストミンスター大教理問答問 195 より)

1月31日

## 「時が満ちて」

マルコ 1:12-13

武安 宏樹 牧師

主イエスの宣教開始の号砲が鳴り響く記念すべき瞬間です。ヨハネは公然とヘロデの不正を告発したために投獄され、主イエスもガリラヤに退き、この一帯を中心に宣教しました。「宣べて言われた」は継続的な意味です。

### 1. 「神の国」の到来(15節前半)

「時」を表すギリシャ語は2つあり、ここでは決定的な機会を表す「カイロス」が使われています。この箇所では世の趨勢によるのではない「神の御旨の深慮による永遠の計画＝聖定」による神の定めた時間を意味します(エペソ 1:11)。終わりの時代に救い主が現れることが約束されています(Ⅱサムエル 7:12-13)。民の度重なる背信によって捕囚となっても、神の計画は変わりませんでした。ついに「満を持して」神の御子は世に送られた。神の国が近づいてきたのです。この「時」の重要性をパウロも指摘しています(Ⅱコリント 6:2/ I テモテ 2:6)。神の国は「すでに」実現しつつも、主の祈りにあるように「これから」実現するという二重性があります。私たちはその狭間で「神の国」完成へのカウントダウンの時代に生きています。花婿を出迎える娘たちのように、私たちは神の国が近づいた喜びと、主の再臨を待ちわびる緊張感に生きるべきです(マタイ 25 章)。

### 2. 「悔い改め」と「信仰」(15節後半)

「神の国＝永遠のいのち」が近づいたことを受けて、主イエスが命じたのが、「悔い改め」と「福音の信仰」です。「悔い改め」は自己中心からの方向転換です。真の悔い改めは、知性・意志・感情を含む私たちの全人格的な神への応答です。神は真実で、弱い私たちの悔い改めを受け入れてくださいます(Ⅱテモテ 2:13)。そして「福音を信ぜよ」(文語)と繰り返し言われます。イザヤの預言の実現を語られたように(ルカ 4:18)、主イエスが終わりの時代に遣わされたこと自体が福音です。私たちは神の愛の中に留まる限り生かされています(ヨハネ 15:5,9)。また私たちが励むべきことは、宣教命令(マルコ 16:15)に従い、委ねられた福音を世の終わりの足音が聞こえる今、「すべての者に」伝えることです(テトス 1:2-3)。

2月7日

## 「ついて来なさい」

マルコ 1:16-20

武安 宏樹 牧師

主イエスが弟子たちを召される場面です(ヨハネ 1:35-42)。ユダヤ教のラビに教えを請う場合をはじめ、一般的には弟子の方から師匠を選んで入門します。しかし会って間もない弟子たちに「ついて来なさい」と御自ら声をかけたのはすごいことです。彼らは「無学な、普通の人」(使徒 4:13)に過ぎませんでした。ただそこには主イエスの超自然的な選びが存在した。神の召命は一方的です。彼らは霊的理解に鈍く、とんちんかんな返答をし、誰が一番偉いかが関心事という、弟子に必要な謙遜さとは程遠い者たちでした。しまいには十字架を前に師から逃亡という、破門に値する失態を晒した、情けない者たちでした。

なぜこのような弟子たちを選ばれたか。有能だからでも、無能だからでも、凡庸な人々から無作為にでもない。神の選びには理由があります。それは、信仰によって御自分について来る者を選ばれたからです。神はどんな時にも私たちと共にいてくださる。さえない人をも神が用いられるのを見る時に、世は神の選びの深遠さをほめたたえ、信仰が人を変えることを知るので。

4人は信仰の父アブラハムの如く、主イエスの召しに単純に応答しました。網は商売道具ですが、家族や職場ともども捨てて従うところに彼らの信仰の資質を見ることができます。「ついて行く＝従う」とは全人生を主イエスに委ねる決心をすることです。主イエスの救いは一方的な恵みと選びによって、私たちを召され(Ⅰコリント 1:9＝有効召命)、途中で破棄されません(ローマ 11:29)。彼らは聖霊に押し出され、福音によって世界を変革する原動力となりました。召命は不変ですが更新されます。御声により新たなチャレンジを受けている方は信仰の一步を。そうでない方も祈りで御声を探ることができるように！

「神がその愛するみ子において受け入れ、みたまによって有効に召命され、きよめられた人々には、恵みの状態から全的にも最後のにも墮落することはあり得ない。かえってその状態に終りまで確実に堅忍し、そして永遠に救われる。」

(ウェストミンスター信仰告白 17 の 1)

2月14日

## 「権威ある者」

マルコ 1:21-28

武安 宏樹 牧師

主イエスが汚れた霊につかれた人から、悪霊を追い出す場面についてです。「悪魔払い」については他宗教や土着の信仰の中でも多々行われていますが、私たちは聖書を基準に、悪霊・キリストの権威・行使目的を検討すべきです。

湖北西岸のカペナウムはガリラヤ伝道の本拠地となった町で、さまざまな御業が行われたにも関わらず、悔い改めなかったのが滅びました(ルカ10:15)。その遺跡の中で最も有名なのが「会堂＝シナゴグ」で、律法教育の場でした。律法は膨大ですが、人生の全状況に解釈によって当てはめようとしていた。そんな律法学者のこじつけのような教えと違い、主イエスには権威があった。それは理屈ではなく、律法の底辺に流れる霊的原則が語られたからでしょう(マタイ 22:36-40)。主イエスのことばは規律や組織に押し込めるのではなく、愛と公義によって叱咤激励しながら、人を生かす権威に満ちているのです。

悪霊に取りつかれた人の異様な光景に、会堂は騒然としたことでしょう。悪霊は神の権威に恐れおののきます。主イエスが地上に来られたこと自体が、終わりの日の近いしるしですから、滅びの前に断末魔の苦しみをしつつも、弱い人の内に入り込んで、自分の力を誇示しようとする至極卑劣な者です。主イエスはその人ではなく、悪霊に向けて「黙れ。出て行け。」と命じた。悪霊に命乞いを許さず、主の愛する者を攻撃、癒着するのを許さなかった。主イエスの短い命令は、律法学者の長い理屈や魔術師の呪文とも異なって、御名による権威に満ちていました。聖なる御言葉によって悪霊は切り離され、その正体が暴かれた。その人は、「何の害も受けなかった」(ルカ 4:35)のです。

この奇蹟に全会衆は驚かされ、宣教における効果は甚大だったでしょう。奇蹟やいやし等の霊的解放は神からの素晴らしい恵みですから、私たちは積極的にこれらを用いるべきでしょう。しかし主イエスは奇蹟が目的だったのではありません。体験だけではなく、個人的な信仰告白をもって主につながり、権威に従って信仰に生きる者となるよう望んでおられます(ローマ 10:9-11)。

2月21日

## 「ひとりの王のもとで」

イザヤ 32:1-5

吉持 章 師

見よ。ひとりの王が正義によって治め、このひとりの王こそ、来るべきメシヤキリストのことです。そのメシヤが到来されると、首長たちが立てられ、その首長たちは公義によってつかさどる。公義とはローカルな国家や、一時代の偏った義ではなく、時間と空間を超えた普遍的な義のことです。

「イエス・キリストはきのうもきょうも、いつまでも同じです」の普遍の義です。ひとりの王の下に立てられる首長たちについて、新約聖書は「こうしてキリストご自身がある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師としてお立てになったのです。それは、生徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」と教えています。ではその立てられた首長たちはどのようにその公義を達成するように求められているのでしょうか。

第一は風を避ける避け所、人々の風除けとなって、第二はあらしを避ける隠れ場、駆け込み寺となって、第三は砂漠にある水の流れ、人生に渴いた人々のオアシスとなる。第四はかわききった地にある大きな岩の陰のようになる。焼き尽くす批判の日照りにさらされている人々を守る大きな背中となるのです。今の時代、箱物は立派、制度も見事、しかし、その施設や制度の隙間を埋める、愛の隙間奉仕者がいないのです。そのため年間3万人以上もの命が施設と制度との隙間から零れ落ちています。主の教会の首長たちがこのような公義の実践をはじめれば、これを見る者は目を見張り、これを聞くものはその言葉に聞き耳を立てるでしょう。さあひとりの王のもとで公義の奉仕を始めよう。

[吉持 章 師プロフィール]

1936年足助生まれ。岡崎公園での天幕集会にてイエス・キリストを信じる。

日本クリスチャンカレッジを卒業後、愛宕山、浜松中沢、茨木聖書、平和台恵の各教会を牧会。同盟教団理事長。

日本福音同盟理事長、東京キリスト教学園理事長を歴任。

現平和台恵教会(千葉県流山市)牧師、いのちのことは社伝道グループ理事長。



2月28日

## 「権威を用いる」

マルコ 1:29-34

武安 宏樹 牧師

### ① 家庭での奇蹟(29～31節)

前回に引き続いて霊的解放といやしの場面です。会堂を出た直後に赴いた所は意外なことにペテロとアンデレの実家でした。既に献身を志した身とはいえ、床に臥せている家族のことを思わないわけはありません。主イエスはこのことをよく知っていました。家族を捨てるのが献身ではありません。献身を通して家族を主に委ねるので(マタイ 10:37-39)。献身との関連は不明ですが、彼女は霊的な病に冒されていました。主イエスがしかって(ルカ 4:39)、熱はひき、彼女はすぐにいやしの感謝にあふれて、給仕の奉仕を始めました。弟子たちは捨ててきた家族が、闇から祝福へ変えられるのを面前で見ました(使徒 16:31)。信仰は神との個人的関係に始まりますが、祝福は個人に留まりません。私たちが神を第一とするなら必要は全て備えられます(マタイ 6:33)。

### ② 群集への奇蹟(32～34節)

会堂→家庭と続いた主の働きは、不特定多数の霊的病で苦しむ人々に拡げられます。安息日厳守の規定から(出エジプト 20:8-11/民数 15:32-36)、日没時に戸口に殺到しました。霊的戦いの祈りは決して楽なものではありません。主イエスはまとめて祈るのではなく、「ひとりひとりに手を置いて」(ルカ 4:40)いやされました。深くあわれまれ、手を抜かずに真剣に祈りを捧げました。愛する弟子のしゅうとめに捧げた祈りにも、真剣さは決して劣らなかった。「いつでも、どこでも、だれにでも」誠実にミニストリーを行う姿勢に学ばされます。対して群集の方は個人的に献身を願ったのではなく、御利益的信仰です。主イエスは全知の方だから、彼らの心の中は知っていたでしょう。しかし、「偽りのない愛」(Ⅱコリント 6:6/ローマ 12:9/ I テモテ 1:5)で虚心坦懐に魂に向き合い、自らその痛みを背負うのです(マタイ 8:17)。この先たとえ自分から離れていくとしても、愛を思い起こす日が来るように善の種を蒔くのです(ガラテヤ 6:9)。

「会堂→弟子の家庭→群集」は「ユダヤ人→異邦人」にも通じる同心円状の祝福を連想しますが、愛の奉仕に近い遠いはありません。利害関係に囚われず、神の愛に信頼して、奇蹟を待ち望む信仰を私たちは持つことが大切です。

3月7日

## 「祈りから始まる宣教」

マルコ 1:35-39

武安 宏樹 牧師

主イエスは霊的な満たしなしには、何かをしようとはされませんでした。弟子たちがまだ寝ている早朝の「人里離れた所」(共同訳)こそ、誰にも妨げられずに祈りに集中できました。静まって自分から神の方へ目を転じ、賛美を捧げること。キリスト者が相当の時間を祈りに捧げるのは確かに義務ですが、神は幕屋の最奥に存在する至聖所の交わりを備えてくださいます(雅歌 1:4)。主イエスは「わたしと父とは一つ」(ヨハネ 10:30)と言われ、パウロはこの奥義を、十字架の贖いにより私たちの内に現実とされたことを証します(エペソ 2:14)。然るべき方法で神と交わりを持つならば、私たちは充電されます(雅歌 8:10)。

主イエスを恋い慕うのは祈りの中における神だけでなく、「みんな」でした。祈りが祈りで終らず実践を伴うのは、デボーションにおける適用と同じです。ただ祈りの中で得た恵みを向けるのは、前日と違う村里の新しい魂でした。「失われた人を捜して救う」(ルカ 19:10)のが主イエスの使命で、限られた時間内で一人でも多くの魂に福音を伝えたい情熱に燃やされていたのでしょう。ユダヤ人のみならず(マタイ 15:24)、異邦人宣教も(ヨハネ 10:16)視野に入っていた。「ひとりひとりへ」と「世界宣教」という二つの視点をもって、昇天されて以降に聖霊を受けた弟子たちが宣教を担うことを覚え、彼らと実地訓練を積んでいたのです。次々と新しい町や村を巡って伝道することは、真剣な祈りと霊的緊張感がなければ難しいこと。祈りにおける豊かな交わりは救霊の情熱へと駆り立てます。「祈りは信仰の最も主要な実践」(カルヴァン)だから御霊の声に耳を澄まし、力を受けて、召されている新たな分野に一步踏み出しましょう。

3月14日

## 「福音を全地に」

マルコ 1:39

武安 宏樹 牧師

### ① 福音を伝えること

主イエスは弟子たちを伴ってガリラヤ中をくまなく巡回し、安息日ごとに会堂で権威ある御言葉を語り、平日にもあらゆる所で福音を宣べ伝えました。「時が良くても悪くてもしっかりやりなさい」(Ⅱテモテ 4:2)パウロの語る宣教の模範が主イエスの働きです。ガリラヤ中に宣べ伝えた目的は救霊の情熱です。「いつでも、どこでも、だれにでも」伝えるのが私たちの使命です(マルコ 16:15)。福音を語ろうとする時に否定的な思いに苛まれることも、時にあるでしょう。けれども宣教命令はあくまで「伝える」ことで、結果は神にお委ねすべきです。聖霊に導かれてはつきりと福音を伝えるならば、信じるか否かは相手の責任ですし、蒔かれた種は何十年先になるかわかりませんが、必ず実を結ぶ時がやってきます(イザヤ 55:11)。結果を委ねて平安をいただき伝道するところに、人間的な思いが死んで聖霊が後押しされるのがわかります。そうでないと、不毛な論争になったり、失望、落胆したりします。私たちが神に信頼して、まだ周りに福音を伝えていない人が居たら伝え、すでに伝えているならば、聖霊がその人に働かれるよう私たちは祈りつつ、救いの時を待ちましょう。

### ② 弟子を通して全地へ

ガリラヤ中に福音を伝えた二つ目の目的は、全世界に福音が伝えられて、終わりの日が早く来るためです(マタイ 24:14)。神は「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられ」(Ⅱペテロ 3:9)ます。誰一人こんなに素晴らしい知らせを聞くことがなかったと言われぬように、世の終わりのタイミングを見計らっておられます。その時は私たちによる宣教の進展によっていくらでも早くなりうるものです。終わりの日の宣教は、主イエスが弟子たちを任命し、教育することで全世界へ広がっていきました。限られた時間の中で効果的に福音を伝えていくためには、教育が必要です。全てのキリスト者が弟子になるべきですが(マタイ 28:19)、とりわけ忠実なリーダーが育てられることをパウロは勧めます(Ⅱテモテ 2:2)。私たちが御霊の実を結ぶ弟子となり(ヨハネ 15:8)、新たな弟子を生み出す希望を持ちましょう。

3月21日

「神はあなたを救うために来た」

ルカ 19:1-10  
近藤 光生 師

① 求めるザアカイ(1～4節)

- ザアカイの紹介
- 木に登るザアカイ
- イエス様が通り過ぎようとされる所の木に上った

適用

精一杯イエス様を求める

② 普通じゃない招き方(5～7節)

- イエス様は声をかけた
- 人々は幻滅した

適用

イエス様は周りを気にせず、私達のところに入ってくる

③ 決心するザアカイ(8～10節)

- 立って主にいった
- 人々は幻滅した

適用

イエス様を迎え入れる時に救いが起こる。

結び

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

(使徒の働き 16章 31節)

3月28日

## 「苦しみのかなたに」

詩篇 119:65-72

武安 宏樹 牧師

信仰者の苦難から主なる神を見上げます。詩 119 篇は「8×22 段落＝176 節」で構成され、さらに各段落の頭がヘブル語のアルファベット順と凝った構造となっています。本篇最初の段落が全体を要約するのも詩 1 篇が詩篇全体の精神を要約するのと同じです。「みおしえにより歩む～喜び～口ずさむ」のは、平穩無事な日々とは限らず、「すべての事について感謝～」(I テサ 5:18)とは、迫害下でパウロが教会を励ますためのすすめでした。キリスト者は主の似姿に変えられていく聖化の過程で苦難を経験します。苦難と御言葉は不即不離の関係ですが、私たちは時に信仰が挫折することもない訳ではありません。

苦難と聞いて真っ先に思い起こす信仰者はヨブではないでしょうか。彼の神を恐れ悪から遠ざかる潔白な信仰について、サタンは彼が平穩無事であるから信仰を保っているだけで、家族、財産、健康といった所有物を取り上げたら神を呪うに違いないと考え、許可を得て彼を攻撃しました。全てを奪われ、周囲の者も離れ、妻まで絶望し、近づいてきた3人の友人との水掛け論さえ、ヨブの孤独感を深めるのみでした。しかしこの期に及んでも神に近づいて、真意を確かめようとした彼に神は答えられた。罪は犯さなかったけれども、自分の潔白さをもって神に近づいて、論争しようとした愚を示されました。

ヨブは信仰のあり方を正されて、神の全能、真実、慈愛について悟りました(ヨブ 42:6)。苦難を通して碎かれ、自らの罪深さを知り、体験的に神を知りました。「あやまちを犯し」(119:67)とは「迷い出る」意で、過失を表します。分別を弁えない焦点のずれた信仰は、正しい行いをしても罪の中にいます。しかしそれでも神を求め、出会う体験を通して自らの愚かさ小ささを痛感して悔い改めに導かれるのです。悔い改めで神との位置関係が明確化します。「みおしえにより歩む～喜び～口ずさむ」のが全てとなる。それだけではない。神の御手にへりくだるなら、ヨブの結末の如くかつての倍の祝福を受けます(ヨハネ 15:7-8)。主なる神は苦難を通して私たちを練り清め、さらに尊く用いられます(ヘブル 12:1-13)。苦難を真正面から受けとめようではありませんか。

4月4日

## 「復活の恵み」

Iコリント 15:1-11

武安 宏樹 牧師

### ① 復活の事実(1～9節)

今日の箇所でパウロの言わんとする事実の中に、新しいことはありません。「受け入れ」は過去形だから過去の事実を表し、「立っている」は完了形だから継続の意。よって確かに信じて生活していたはずの福音についておさらいを必要としていたのでしょう。教理を正しく学んでおさらいしていくことは、その後に何十年と続く信仰生活の上で決定的に重要だし、適用が広がります。パウロはキリストの復活に立ち会っていませんが、聖書の記述の権威およびダマスコ途上での邂逅(使徒9章)により、復活の証人として力強く語ります。「死なれた」「葬られた」は過去形ですが、「よみがえられた」は受身かつ完了形ですから、復活が父なる神の力により成されて今もキリスト者の内に力強く働かれるのを意味します。彼が「十二弟子」に較べて「月足らずで生まれ」るも、赦しの恵みと使徒に任じられた喜びにより、満たされていました(IIコリ11:5)。

### ② 復活の現在(10～11節)

復活の事実は聖書に記され代々受け継がれつつ、信じる者にリバイバルを与えてきた生きた事実です。パウロの人間の優越は復活の素晴らしさに比べて「ちりあくた」と見なしています(ピリピ3章)。赦しの恵みと日々の復活体験を味わっている人は彼のように謙遜ですが、御霊に背中を押されて奉仕します。「多く働きました」とは疲労困憊するまで働く意です。ワーカーホリックでも、罪意識からでもなく、恵みに燃やされて働きます。私たちはまっすぐに福音を信じる必要があります。御言葉に加除すれば、災いや恵みの欠如として現れます(黙示22:18-19)。復活の御業が私たちにどれほど大きいのか再確認して、私たちが主の復活の証人だと高らかに宣言する者とされましよう(ガラ2:20)。

[復活についての教え～ハイデルベルク信仰問答問45より]

「キリストの『よみがえり』は、わたしたちにどのような益をもたらしますか。」

「第1に、この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして、御自身の死によってわたしたちのために獲得された義にわたしたちをあずからせてくださる、ということ。第2に、その御力によってわたしたちも今や新しい命に生き返らされている、ということ。第3に、わたしたちにとって、キリストのよみがえりはわたしたちの祝福に満ちたよみがえりの確かな保証である、ということです。」

4月11日

## 「お心一つで」

マルコ 1:40-45

武安 宏樹 牧師

「ツァラート=らい病」については、レビ記 13~14 章に詳述されています。患者は生きた屍とみなされ、いやされるのは死人が生き返るのと同じくらい困難と考えられていました。聖書ではモーセ(出 4 章)やナアマン(Ⅱ列王 5 章)のいやしを通して、神の奇蹟の介入が前提になっていることがわかります。

### ① 駆け寄る患者の信仰(40節)

彼は山上の説教の権威ある御言葉に反応して、取り巻く大勢の群集をものともせず御前に進み出ました。自分の身分が相応しくない者であることは、百も承知でしたが、たとえ門前払いされても会いたいとの信仰が明らかです。「お心一つで=御心ならば(共同訳)」には、主イエスの権能を 100%信じて、決定権も 100%委ねていることがわかります。彼の言動から教えられるのは、第1になりふり構わず御前に入る信仰(11:22-24)、第2に御心が何かを祈りの中で探ること(Ⅰヨハ 5:14)。砕かれた者こそ御前に駆け寄ることができます。

### ② 主イエスのあわれみといやし(41~42節)

そんな彼を主イエスはあわれまれ、汚れをいとわず御手を伸ばされました。即座に完全ないやしが与えられました。「わたしの心だ。きよくなれ。」の御声と共に、彼の人生は闇から光へと変えられました。私たちはツァラートではなくとも、罪の痛み苦しみによって汚れと恐れに苛まれていないでしょうか。しかし十字架の贖いによって私たちに御手は伸ばされています(イザ 59:1-2)。破棄済の債務証書におびえる不信仰でなく、御心に適ってきよめといやしを行われる主のあわれみの前に、弱さをさらけ出しましょう(ヘブ 4:15-16)。

### ③ 望まれない宣伝(43~45節)

いやしの後の主イエスの言動は不思議に感じはしないでしょうか。それは、福音宣教以上にいやしに注目が集まることへの警告です。来る者拒まずでも、自らいやしを行うために病人を捜すことはされませんでした。体の一部ではなく、彼のように全人格の救いを求めて来る者を、主は求めておられます。

4月18日

## 「罪を赦す権威」

マルコ 2:1-12

武安 宏樹 牧師

### ① 信仰を見られる主(1～5節)

ガリラヤ宣教の根拠地となるカペナウムを再訪すると、聞きつけた群集で大混雑となりました。彼らはいやしよりも御言葉を求めて集っていました。そこへ中風患者の友人4人が何とか彼を主に会わせたいと知恵をしばって、屋根をはがしてつり降ろすという妙案を実行しました。ツアラート患者は、自力で主の前に進み出しましたが、中風の彼は兄弟姉妹の協力を得て来ました。ここに美しい交わりと共に、強引にでも主の前にお連れする実行の重要性を学ばされます(ヤコ 2:17)。主イエスは彼らの信仰に感心して、宣言されました。「子よ。あなたの罪は赦されました」なぜここで「いやし」でなく「赦し」なのか。それは彼の深みに罪意識による苦しみがあることを見られたからです。当時は罪の赦しと病のいやしは密接な結びつきが考えられていました。どちらを宣告しても結果は同じですが、彼の存在により根本的な宣告をされたのです。「全き愛は恐れを締め出します」(Iヨハ 4:18)恐れて死ぬことしか考えなかった彼は、愛されて生きる意味を知りました。病は神のわざが現れるためでした(ヨハ 9:2-3)。彼の人生は友の信仰に助けられ、闇から光へと変えられました。

### ② 罪を赦す権威(6～12節)

「ところが」、律法学者が「罪を赦す権威」について駄目出ししてきました。御名への冒瀆は死罪にあたるので(レビ 24:16)、彼らの指摘は一理ありますが、隣人愛(レビ 19:18)を忘れて「木を見て森を見ず」的な、実に愛のない神学です。病は罪ゆえで神以外ではいやされないと断定していました。間違った彼らの見解に主イエスは力をもって対決しました。より直接的に「起きて、歩け」と命じてそのようになったことで、律法学者たちの屁理屈は打ち砕かれました。信仰により行われた神の御業を通し、人を罪に閉じ込める悪魔の策略が粉碎されたことで、周囲に「罪の赦し→いやし」と正しくインパクトが与えられた。御言葉をただ聞くだけでなく、囚らずも人を変える力があるのを学びました。私たちが冷たい理屈で隣人をさばいて罪に閉じ込めるのではなく、固定観念を悔い改め、友人たちのように神の通りよき管として御前に進ませましょう。



4月25日

## 「罪人を招くために」

マルコ 2:13-17

武安 宏樹 牧師

主イエスがガリラヤ湖畔で群衆に向かい御言葉を語られているところで、取税人レビ(マタイ)に目が止まりました。「ついて来なさい」の言葉に即座に彼は従いました。ペテロやヤコブ両兄弟の漁業という「堅気」の職に較べれば、帝国に税金を上納したうえで私腹を肥やす取税人は、皆に嫌われていました。金をうなるほど持っていたても、自分の存在が社会的に白い目で見られるのは、寂しいことです。本音を言えば、好きでやっているのではなく「社会悪」なのだ。そう割り切ろうとしたとしても、心の奥は満たされぬ思いでいっぱいでした。

彼は「幸福なるかな、義に飢え渴く者」(マタイ 5:6 文語)のメッセージを聞いた。神から見放された孤独感と、善行の能力なき罪深い者であることは百も承知。神に近づくなど恐れ多い。しかし召しを受け躊躇せず罪の生活を捨てました。自分のような者が召された喜びに、「大ぶるまい」(ルカ 5:29)など訳ないことでした。歓迎会にはひっきりなしに、彼の仲間が主イエスを求めて来ました。主イエスは彼らとの食卓を喜びとされました。悔い改めて信じるのならば、誰でも友となってくださる分け隔てのない愛がここにあります。この食卓は主にある教会の交わりのあるべき姿ではないでしょうか。彼はこの交わりで神の愛と臨在の喜びにふれ、奪い取る者から与える者へと変えられたのです。

しかしこの麗しい交わりに拒否反応を示したのが、パリサイ人(分離主義)でした。律法遵守の最先端を行くエリート集団との自負は主イエスの罪人との交わりは自ら彼らの汚れを受けにくいようで、受け入れ難いものでした。私たちが彼らのように内向きな、「カたい、クライ、コウマンな」3K宗教家のものであってはなりません。主イエスの如く外向きの信仰で、痛みと汚れを担い、惜しみなく与える霊的な交わりの内に、世の人は愛を見出すでしょう。ツァラト、中風、そして取税人。換言すれば、宗教的・肉体的・社会的病人。形は異なれど、自分の罪を認め、救いを求めていのちを得よう(ヨハネ 20:31)と切望した者たちです。彼は退路を断って従いました。正しすぎる者ではなく(伝道 7:16)、「罪赦された罪人」として感謝しつつ義認の恵みに生きましょう。

5月2日

## 「新しい皮袋で」

マルコ 2:18-22

武安 宏樹 牧師

私たちに断食は特別ですが、当時のユダヤ教社会は「贖いの日」(レビ 16:29)に加えて週2回(ルカ 18:12)の断食が一般的でした。問題は断食の姿勢です。主イエスは断食自体を否定されたのではない。花婿＝主イエス、友人たち＝弟子たちを指し、婚宴に例えて主と共に居る期間は喜びであり(ヨハ 3:29-30)、逆に十字架上で死にて喪に服す時こそ、断食するに相応しいと語ります。彼らはモーセ(申命 9:18)、サムエル(Ⅰサム 7:6)、ダビデ(Ⅱサム 12:16)と異なり、神への深い罪の自覚と恐れのない、「自分たちのための」(ゼカ 7:5-6)断食に励んだに過ぎなかった。私たちはこれを一笑に付すことができるでしょうか。盲目的信仰を悔い改めるならば、赦しといやしが与えられます(Ⅱ歴代 7:14)。

飛躍に見えますが、主イエスは着物と皮袋のたとえを通して掘り下げます。膨張力を失った古い布や皮袋に新しいものを張れば、逆効果となるでしょう。この例えの意味は、主イエスの現れに関わらず未だに古い自分中心の生き方ではなく、福音に相応しく新生した生活を送る必要です(ヨハ 3:3-6/Ⅱコリ 5:17)。私たちの人生や価値観は時間と共に古くなりますが、永遠のいのちなる御霊は常に新しくされています。それは私たちの経験した出来事や歴史の流れが無駄なのではなく、摂理の神の超自然的なご計画の中で用いられるものです。ただせっかく救いを受けたのに自分の信仰が古い皮袋のようであるならば、「破れはもっとひどくなり～だめになってしまう」う。これは恐ろしいことです。

「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」。私たちが十字架の前で死に、プライドや価値観に死に、御言葉の示しがある前に動いてみないと気が済まぬ高慢に絶望することです。善い働きをしている他の人を祝福できない小さな自分を叩き割ることです。新しい皮袋となり、神の恵みを出来る限り受けとめたい。自分の変革に臆病であってはなりません。神の恵みをもっと受けたいと願い、ヤコブのように神と真剣勝負する先に、自分のための断食に明け暮れる肉的な信仰生活は後退します。ダビデは「わが酒杯はあふるるなり」(詩 23:5 文語)と歌いました。新しい皮袋もて、新しい御霊を受けようではありませんか。

5月9日

## 「安息日のおしえ」

マルコ 2:23-28

武安 宏樹 牧師

前回の断食に比べて、パリサイ人から批判の色濃い疑問が提出されます。麦の穂を摘むことの是非ではなく(申 23:25)、それを安息日に行ったことが問題となります。ユダヤ人はバビロン捕囚の反省から(エゼ 20 章)、安息日の厳守が主の民としてのアイデンティティと考えました。ミシュナー(口伝)の禁令に、「もみ出しては、食べていた」(ルカ 6:1)弟子たちの行為が抵触しました。律法遵守に対するパリサイ人の熱心は評価されるべきですが、断食と同様に、守ること自体が目的と化し、結果として細かくマニュアル化してしまった。聖書解釈をマニュアル化すると都合のいい解釈に陥ります(Ⅱペテ 1:20-21)。私たちは御霊に心の深い動機を探られながら、御言葉を守ることが大切です。安息日の目的は私たちが創造(出 20:8,10)と救い(申 5:15)を覚えるためです。

主イエスは旧約聖書(Ⅰサム 21 章)の権威をもって反論しました。ダビデの場合と異なり、主イエスのご自分ではなく弟子の律法違反を弁護しました。緊急事態に際して、律法に拘泥するよりも空腹という生理的欲求を優先する。聖書の御言葉から対抗するのは、荒野で悪魔に対抗したのと同じ手法です。山上の説教と矛盾するようには思えますが(マタ 5:17-20)、主イエスは律法違反をすすめたのではなく、制定された神の御心を行って義を完成させることを願っていました。パリサイ人は律法の番人と自認する罪を犯していました。「人の子は安息日にも主」とは主イエスこそ律法の完成者、束縛からの解放主であることを証します。真の安息は律法の文字通りの行いでなく、御霊の働きです(Ⅱコリ 3:6)。私たちは自由と勝利の信仰に歩み(ヨハ 8:32/Ⅰヨハ 5:3)、安息日を喜び、主イエスが私たちの欠けを覆われるよう期待しましょう。

[安息日についての教え～ウェストミンスター大教理問答 121 より]

『覚えよ』という言葉が、第4戒の初めに置かれているのは、次の理由による。すなわち、一部には、それを覚えることの大きな利益のためであって、わたしたちはそのおかげで、これを守る準備において助けられるし、またこれを守るに当たって、残り全部の戒めも一層良く守り、宗教の短い要約を含む創造とあがないという二大利益についての感謝に満ちた記憶を継続させることを助けられる。

5月16日

## 「信頼」

ヨハネ 18:1-11

佐藤 博 師

ゲッセマネの出来事についてヨハネ福音書にしか書かれていないことが7つあります。

- ①ゲッセマネの場所(エルサレムの東側)が具体的に書かれています。
- ②ゲッセマネの祈りが書かれていません。ここでの出来事は祈りの後の出来事です。
- ③イエスを捕えるために兵士たちが700、800人いました。
- ④たいまつを持っていたことから、闇の中での出来事です。
- ⑤ユダが接吻するシーンがなく、ヨハネの福音書にはただ立っていたと書かれています。
- ⑥イエスが弟子たちを去らせました。弟子たちがイエス様から逃げたわけではありません。
- ⑦つるぎを持っていたのはペテロ。

これらの記載はイエス様が神の御子であることを示しています。

イエス様はご自分を捕えようとしていた兵士たちに対して「それはわたしです」と言われました。まずご自分の正体を明らかにしました。また、自ら十字架の道を選ばれました。

イエス様は弟子たちを去らせました。それはイエス様のことばが実現、すなわち成就されるためです。その背景には17:12のことばがあります。イエス様のことばが預言と同等に扱われました。私たち人間の本質は裏切りですが、イエス様はそれをよしとされました。しかし、この預言(17:12)が成就する条件はイエス様に立ち返ることです。

イエス様は最後に「父が私に下さった杯を、どうして飲まずにいられようか。」と言われました。杯とは「十字架」また広くとらえると「神の御旨」です。私たちの勝利のためにイエス様は十字架にかかられました。イエス様は神様であるがゆえの十字架です。

私たちは主の祈りの中で「みこころが天で行われる様に、」と祈ります。この「みこころが」こそがイエス様のゲッセマネの祈りです。主の祈りは神様に信頼していないと祈れない祈りです。

5月23日

## 「聖霊に満たされた生活」

エペソ 5:15-21

武安 宏樹 牧師

主イエスは復活の後に天にお帰りになり、弟子たちが待っていると聖霊が約束通り降られました。これがペンテコステの出来事です。以後、使徒書の内容は「聖霊行伝」と言えるものです。力強い宣教、救い、解放、交わりの成長。殉教はリバイバルの火種となりました(ヨハ 12:24)。初代教会での聖霊の働きを私たちも正しく継承するために、聖霊の働きについて知る必要があります。

### ① 信者に刻印される聖霊(エペソ1:13~14)

「聖霊は私のどこにおられるか？」創造と統治を行われる点で「外」は正しい。私たちの救いについて、背後から受け入れるように促すのも聖霊の働きです。それだけではなく「内」に臨在されて、キリスト者である「証印」となられます。目には見えない印ですが、御霊の実(ガラ 5:22-23)や賜物(Ⅰコリ 12:)を通して、私たちの霊的人格および奉仕となって現れます。両方が豊かにされることで、神に栄光をお帰しすることができます。私たちは自身の欠けを痛感しますが、だからこそ聖霊が共に居られることを認め、聖霊の働きなしに何もできないことを認めましょう。人格者として主イエスの如く先立ってくださいませ。

### ② 聖霊に満たされた生活(エペソ5:18~20)

「満たされなさい」は命令です。私たちの弱さだけでなく、霊的に悪い時代のために霊的識別や洞察が必要だからです(5:15-17)。聖霊の満たしに必要なことは、まず罪の赦しの確信です。それでも罪を犯してしまったらダビデの如く砕かれた心で罪を告白し(詩 51:)、霊のリニューアルをいただくこと。18~20節「満たされ~語り~歌い~賛美~感謝しなさい」は継続的意味です。今日の①が消極面なら、②は自ら聖霊の継続的満たしを求めていく積極面と言えます。私たちは求めることで(マタ 7:7-8)、聖霊の実と賜物が増し加わり、いっぱい満たされていっぱい流し出すことが御心です(詩 81:10/Ⅱ列 4:1-7)。

聖霊の体験については見解は教団教派各様ですが、信じた瞬間から臨在されると共に、私たちの弱さを打破して主こそ神であることを知らしめるため、信仰生活の根底を揺さぶられるような体験をすることも、時にあるでしょう。しかし赦しの確信と聖霊の満たしの生活の上で、体験も生かされるものです。

5月30日

## 「かたくなな心」

マルコ 3:1-6

武安 宏樹 牧師

前回の麦畑につづいて、安息日での主イエスとパリサイ人との問答です。表向きは神学論争に思えますが、実はそうでないことがはっきりしてきます。「片手のなえた人」の存在は、パリサイ人の側にはどうでもよかったのですが、彼らは会堂の後から、主イエスが彼をいやされるかどうか注目していました。安息日違反で告発すれば、厄介者を片づけることができる。彼らには魂への配慮など全くなく、自分たちの立場の維持が生命より大事と考えていました。

彼らの予想通り主イエスはいやされましたが、それ以前に彼らの心の内を見透かしておられた。かと言って自分の立場のためにいやしを止めなかった。主イエスは平易なたとえで(マタ 12:11-12)、安息日の正しい目的を問いつつも、彼らは論争に勝つ見込みもなく、立つ瀬がなくなるからただ黙っていました。主イエスの目的は救い、彼らの目的は殺しです。「文字は殺し、御霊は生かす」(Ⅱコリ 3:6)とある通りです。手は元どおりとなり、躍り上がって喜ぶ一方で、彼らはこれを奇貨として、会堂を飛び出して殺害準備に取りかかりました。ヘロデ党とは政教一致することで、包囲網を構築しようとしたに過ぎません。

主イエスは怒りを現された。それは不義を許さない、聖なる神の感情です。「かたくな」を熟語にすれば、「頑固」「頑張り」「頑強」など必ずしもマイナスばかりでない意味が出てきますが、聖書的には「神の前に」との枕詞がつきます。神の要求する謙遜や柔和が見られず、反抗し続ける高慢な態度、「頑迷」です。神は出エジプトで不平不満を述べる民のかたくなさを嘆かれ(詩 95:/出 32:9)、イザヤは「首筋は鉄の臄、額は青銅」(イザ 48:4)と称した岩盤の如く固い靈性。自分のあり方に固執するあまり罪深さを認めず、神を求めない者に接近するのはサタンです。サウルの如く不信仰な者には不安と迷いに満ちています。石の心を柔和に変えるのは神ご自身の個人的介入によります(エゼ 36:25-26)。私たちは「頑～」のつく信仰生活ではなく、柔和(マタ 5:5)な心にされましょう。主イエスさえ、神のあり方に固執されず、卑しくなられたのです(ピリ 2:6-7)。

6月6日

## 「退かれる主イエス」

マルコ 3:7-12

武安 宏樹 牧師

主イエスはこれまでユダヤ教会堂を中心に福音宣教をされてきましたが、パリサイ人による殺害計画を知ったことで彼らからは退くことにしました。それは恐れからではなく、「わたしの時がまだ満ちていないから」(ヨハ 7:1-8)。地上での生に執着されませんでした。神から託された福音宣教や弟子訓練などまだ為すべきことは多かったです。その使命感からガリラヤ湖で働きを続けられたのでしょう。しかしそこにも遠方各地から群衆が詰めかけていました。労と時間を惜しまずご自分を求めてやってきた群衆を、主イエスは無下には扱われません。彼らへのあわれみは胸中に沸々とわき上がったことでしょう。けれども、現場は群衆の殺到によって双方ともに危険な状態にありました。サタンの働く機会を封じるために、霊的な秩序が必要でした( I コリ 14:33)。

主イエスは湖畔の斜面を天然の劇場の如く利用しつつ、殺到を避けるため、水面に小舟を浮かべさせて御言葉を語ることにしました。かつての漁師の職が用いられるのは弟子にとっても喜びだったでしょう。水の上からならば、群衆と距離を保つことで、安心して福音を語って、また聞くことができます。「退く」の語は、ヨセフが幼子イエスをヘロデ王の手から守る時(マタ 2:14)や、モーセがパロの手から逃れてミデヤンへ退く時(出 2:15)など、重要な一歩に登場します。退くことで敵の手から守られ、神との交わりに生かされます。「リトリート(退修会)」は私たちが日常の証しの現場から一歩退いて、自身に霊的充電をいただく場。働きにおける「共存」を避けて主に委ねることです。

加えて群衆は偶像礼拝の地方出身者も多く、福音の正しい理解が乏しい故、悪霊の惑わしを受けやすかったと想像できます。「あなたこそ神の子」とは、正統な信仰告白のようにも見えますが、当時の世の中でも様々な用いられ方をされた呼称であることから、思い思いに「神の子」と叫び続けることで、間違った理解に至らせる恐れがありました。戒められたのは、そのためです。宣教の現場は霊的戦いがあるため、中に入ってもみくちやになるのではなく、一歩引いた視点から全体を俯瞰することで、神中心の伝道がなされるのです。

6月13日

## 「十二弟子の任命」

マルコ 3:13-19

武安 宏樹 牧師

十二弟子は主イエス直属の「特別強化指定選手」でした。選考基準は具体的には記されていませんが、夜を徹して祈り抜いた末に(ルカ 6:12)、主イエスの「お望みになる者たち」が選ばれた。だから人間的ではなく、神の選びでした。山といえば、シナイ山でのモーセ(出 19:20)、ホレブ山でのエリヤ(Ⅰ列 19:8)、変貌山での主イエス(9:2)など神の啓示を受けるべき重要な任命の場でした。12という数字もイスラエル 12部族など、聖書では完全数として頻出します。そのような厳粛な任命式で選ばれたのは、名もない漁師の兄弟や「雷の子」というほど気性の荒い兄弟、熱心党员＝極右主義者、売国奴に等しい取税人といった「凡人と変人」の集団でした。世の視点ではあまりに意外な人選でした。

14～15節には任命の目的が3つ記されています。1つ目は彼らを身近に置いて衣食住を共にすること。彼らは不器用ながら主イエスを慕って全人格と全時間を捧げていました。少々の困難があっても主に従い通す潜在能力を、主イエスは認めていました。2つ目は福音を宣べ伝える働きに遣わすため。御側で教えられたことを忠実に行うことに加え、大宣教命令(16:15)成就のために喜んで犠牲を払う弟子を選ばれました。福音を伝えるために愛と信仰と謙遜の限りを尽くす者、挫折をしない者こそ、主の弟子に相応しいのです。3つ目は諸々の悪霊を追い出す権威を持たせることです。この権威を有するのが使徒だけか、キリスト者全体かは議論がありますが、1つ目の主の臨在および2つ目の福音宣教の目的の中で、全体に与えられています(16:17-18)。

たしかに意外な人選に見えたかも知れませんが、主イエスの目に彼らは宣教の働きを委ねるべき、宝石のような存在でした。個人的にも集団的にも、欠点はたくさんあったでしょうが、主が選ばれた楽しみな弟子たちでした。いろんな背景をもった人々が主に召し出されて、手を取り合いながら、中央に居られる主を見上げていく交わり。十二弟子は主イエスを中心とした共同体であり、教会の始まりでもあります。私たちも主に選ばれた者(ヨハ 15:16)として彼らのように弟子として主を愛し、福音を伝えようではありませんか。



6月20日

## 「信仰生活の武具」

エペソ 6:10-18

村松 勝三師

信仰生活といわず、私たちの全生活はまさに悪魔との戦いです。私たちの戦いは血肉との戦いではなく、私たちの信仰を神様から離れさせようとする悪魔の策略との戦いです。

悪魔の策略とは私たちが神様から離れる様に、またのろう様にするためのものです。(ヨブ 1:9-11)

その悪魔の策略から身を守るために私たちは武具をつけなさいと今日の箇所では語っています。その武具は何でしょう。

1. **帯**、着物にとって帯は最も大切なものです。帯は真理です(ヨハネ 14:6)。私たちはキリストという真理の帯を身につけているなら、悪魔の入る隙はないでしょう。
2. **正義の胸当て**、正義は悪魔の策略を跳ね返すものです。
3. 平和の福音である**履物**、私たちはその履物を履いて福音を宣べ伝えましょう。
4. **盾**は悪魔の矢から守ることができます。
5. **兜**は救われている喜びを表しています。苦しい時にこの喜びを思い起こしましょう。
6. **剣**、鋭いもろ刃の剣、これはまさしく神様のことばです。

これらのものに付け加えてもう一つ大切なものがあります。それは祈りです。祈りこそが信仰生活の武具です。祈りは自分のためだけでなく、周りの人のためにも祈るもので、それが最大の武器となります。

これらの武具を身に付け悪魔の策略に打ち勝っていかうではありませんか。

6月27日

## 「赦されない罪」

マルコ 3:20-30

武安 宏樹 牧師

### ①無知ゆえの誤解～家族の場合(20～21節)

主イエスの家族は両親は別として、救い主としては認めていませんでした(ヨハ 7:5)。「気が狂った」とはマルコらしい率直な表現ですが、立派な冒涇です(レビ 24:16)。しかし無知ゆえの過失の言葉ならば悔い改めの余地があります(レビ 4:13-14,20)。どんな罪も見逃されませんが、過失や肉の弱さによる罪には、いけにえ＝主イエスの血潮が備えられて、赦しを請うことが可能です。

### ②故意の誤解～律法学者の場合(22～30節)

神と主イエスをけがす罪も赦されることは、ペテロの否認やパウロの迫害(使 26:11)を見れば明らかです(1テモ 1:13)。しかし律法学者は主イエスが何者であるかを知っていながら、既得権を侵害する者を葬り去る目的で(3:6)、故意に聖霊の働きが悪霊の働きだとでっち上げました。もはや彼らは真理の探究者に非ず、そう認められるために分離主義者として聖人になりたかっただけでした。聖霊の働きは目には見えなくとも、未信者には救いの招きをし、キリスト者には内側から励まし教導する存在です。神と主イエスに反抗したとしても、背後の聖霊の声により悔い改める可能性がまだ残されていますが、「はっきりした悪意をもってこれに抵抗し、ただ反抗のためにのみ反抗する～無謀にも神の御名をはずかしめようとして、意図的に突進する」(カルヴァン綱要)悪意から聖霊に心を閉ざす者には、「死に至る罪」(1ヨハ 5:16)があるのみです。

### ③逆説的な赦しの大きさ

すると私たちは救われているか不安になる方も居られるかも知れません。「墮落」(ヘブ 6:4-6)した者とは背教者のことだから、恐れることはありません。聖霊を悲しませていたなら、それはそれで悔い改めによる回復が必要ですが、聖霊のうめきにより、私たちは赦しの機会を与えられていることを知ります。赦しの大きさを知ることは私たちを献身へと導きます。律法学者への警告は、実は断罪ではなく招きでした。29節は逆説的に赦しの大きさを教えられます。告発者サタンの勢力を打ち破り、主イエスの赦しは十字架上で勝利しました。

7月4日

## 「神のみこころを行う人」

マルコ 3:31-35

武安 宏樹 牧師

主イエスを囲んで黒山の人ばかりができていいる所に、今度は母や兄弟たちの伝言が届けられる様子を、群集が「ご覧なさい～」と主イエスに示しました。口調から察すればまだ神の子との認識はなく、「～とはだれのことですか？」との返答は、家族の結びつきの強いユダヤ人に対し敢えて考えさせる質問となりました。律法(レビ`19:18)の応用ですが、彼らは答に窮したことでしょう。

主イエスの答は衝撃でした。回りに座っている血縁関係のない弟子たちが、母、兄弟というのです。代わりに結びつけるのは「神のみこころを行う」こと。だから肉による血縁関係より、信仰による霊的關係の方が優先されるのです。

一つ目に教えられることは、私たちのアイデンティティが家族、人種を越えること。キリスト者は「神の子」として、人間的な血筋に死んだ者です(ヨハ 1:12-13)。それは第5戒(出 20:12)の無効や家族を軽んじることを意味するのではない。両親を敬うことの彼方に創造主への従順があるからです。だからキリスト者は家族以上に神を第一とすることが求められている。そして家族を養う責任や心配を神に委ねる特権が与えられています。私たちの信仰は家族と紐つきではなく、霊的自立が必要です。家族は自分のいのちのように大事ですが、家族以上に神に信頼する決断を通して結局は家族も祝福されます(マタ 10:39)。

二つ目に教えられることは、神のみこころを行うというヴィジョンです。主イエスを中心とした交わりで受け入れられ、互いに仕え合い、外に証しを為すことです。私たちは成長過程で社会性を身につけますが、孤独な闘いで挫折や失敗も経験します。しかし信者、未信者共に以下の御言葉は福音です。「だれでもキリストのうちにあるならその人は新しく造られた者」(Ⅱコリ 5:17)主イエスを中心とする新しい家族の交わりは、慰めと励ましを受けながらも、主の身丈にまで成長し、地上に主のみこころが成されるよう仕える集団です。「わたしについて来なさい」(1:17)と召集を受けたら、生涯神の家族の一員。個人的にも集団的にも、キリスト者とされた恵みに目が開かれますように！

7月11日

## 「実を結ぶ人生」

マルコ 4:1-20

武安 宏樹 牧師

「水路のそばに植わった木」(詩篇 1:3)とは、どんな木を想像するでしょうか。砂漠の中でオアシスのように人々を潤す木には希望があります(ヨブ 14:7-9)。いかなる大木も種なしには育ちません。このたとえ話で種＝御言葉、福音、蒔く人＝主イエスを指します。蒔き方にムラがないのは前章まで明らかです。たとえの目的は、神の国の奥義を身近な例に置き換え理解を容易にするのと、反対に覆いをかけて霊的に理解できる者と、できない者と峻別することです。私たちは地の果てまで福音を伝える責任がありますが、応答しない者には、終わりの日のさばきが待っています。種蒔きの結果は神に委ねることです。

種の落ちた4箇所は、聴衆の霊的な状態を表します。道端に落ちた種は、聞いただけで、自称「義人」ゆえ受け入れる余地のないパリサイ人の様です。サタンは岩盤の如き心を根拠とし、御言葉を退け自分の言いなりにします。岩地に落ちた種は、せっかく救われたのに、苦難を信仰によって越えられず、萎えてしまった人です。岩地に亀裂と水分が入り、リバイバルを祈られます。いばらの中に落ちた種は、岩地での外圧に比べ、こちらは心の中の問題です。自由意志を与えられた私たちは禁欲生活でなく、「神第一」とする優先順位をつけるべきです。いばらが干渉するなら除去か剪定しないと、占領されます。

そして良い地に落ちた種はぐんぐん育って、30,60,100倍の実を結びます。最初から最後までこのように成長する者は稀です。群衆最前列で弟子たちはたとえの説き明かしを受けましたが、即座の理解は無理でも受け止めることはできたかも知れない。主イエスも現状それで十分と思われたのではないか。当初は自身が「良い地」と思っても、次第に岩地に蒔かれた種のように弱い者、いばらのように悪い思いで満ちている者だと気づかされ、及ばない弟子だと悟った時に砕かれて、それから彼らは「良い地」へと変えられていくのです。彼らは初代教会で使徒として、たしかに実を結ぶ者と変えられた(ヨハ 12:24)。今度は彼らが種を蒔く段になり、このたとえの奥義を完全に悟るでしょう。私たちも悔い改め聴従すれば、岩地やいばらを打破し多くの実を結ぶのです。

7月18日

## 「持っている人は」

マルコ 4:21-25

武安 宏樹 牧師

### ① 「あかり」を灯す人生(21～23節)

「あかり」と聞いて身近に思い浮かべるのは、非常用の懐中電灯ではないでしょうか。これがあれば災害時に夜中に停電しても、つまずかずに済みます。登山で日が暮れても下山できます。ライトの役割は2つ考えられるでしょう。1つ目は使う人の立場から周囲を照らすことです。2つ目は反対に周囲から自分の存在を認識させることです。車にはハイビームとロービームがあり、道路交通法では、状況に応じ切り替えて走行することが、推奨されています。「あなたのみことばは、私の足のともしび」(詩篇 119:105)これは足元を照らすロービームの様です。「神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかり」(黙 21:23)こちらは新天新地において太陽不要なほどに強烈で眩しい光で、照らされた暁には誰も生きながらえることは不可能です。主の再臨の際に受ける光です。しかし主イエスの公生涯(初臨)においては、馬小屋での出生、苦難の生涯、まさにおおいで隠された、分かる者にのみ分かるような登場でありました。そこには私たちの「くすぶる燈心を消すこともなく」、罪人への配慮に満ちた訪れを見ることができます。私たちの人との関わりも、聖霊の導きの中で、ハイとローを使い分けることです。しかし迫害下など緊急事態に際しては、抵抗しなければならない時もあります。その時こそ臆せず照らすことです。

### ② 恵みの「はかり」で祝福される人生(24～25節)

「はかり」は、山上の説教(マタ 7:2)ではさばきについて語られますが、ここでは神からの恵みを分け与える霊的原則について語られています。経済的原則なら大変なことです。主イエスは逆説的に分かりやすく用いられました。金持ちとやもめのたとえ(12:41-44)は経済的・霊的原則が逆転する好例ではないでしょうか。種蒔きのたとえに照らすと分かりやすいですが、霊的理解を持っている者は、いよいよ祝福されて 30,60,100 倍の実を結ぶことでしょう。やもめは神に対する思いが大きく、霊的に豊かだったゆえに、生活費の全部を捧げることができたと推測できます。貧乏でも卑屈ではありませんでした。両たとえ話とも、霊的に祝福されて生きるキリスト者のあるべき指針です。

7月25日

## 「力強い主の御声」

詩篇 29:1-11

武安 宏樹 牧師

詩篇 25～33 篇は以下のように交差対句法の構造を持ち、その中心に大水と雷鳴をもって、被造物の世界の王となられる神を賛美する 29 篇があります。

### ①「主に帰せよ」(1～2節)

「ダビデの賛歌」とありますが、I 歴代誌 16 章の契約の箱安置の感謝礼拝と同じです(28-29 節)。神の箱の臨在の喜びを前にして、あらゆる楽器を奏で、死力を尽して歌い踊る、異常と思えるほどの賛美が再三再四記されています。御霊に酔う強烈さは酒に較べられますが(エペ 5:18)、賛美は単なる浄化作用ではなく、主に栄光をお帰ししたいという被造物である人間の霊的欲求です。

### ②「主の声は」(3～9節)

私たちが天におられる神に礼拝し、天から私たちに下るのは主の御声です。「主の声は」と7回繰り返され、雷のように力強く威厳をもって津々浦々響き渡ります。神は天地創造、地上の統治、救いの完成、世の終わりに至るまで、全てにおいて御声で歴史を造られます。御声の激震により私たちは悔い改め、愛の迫りを感じ、神の聖さを知り、ついには「主に栄光!」と叫ぶに至ります。

### ③「主の祝福」(10～11節)

29 篇の結びで、ノアの洪水の厳粛なさばきと共に、「契約の虹」による祝福を思い起こさせます。御声を拝する目的は恐怖ではなく祝福です。賛美と御声で霊性を揺さぶられつつ、祝福を乞い求めようではありませんか(I 歴 4:10)。

8月1日

## 「信仰による出発」

創世記 12:1-9

武安 宏樹 牧師

アブラムの召命を通し、彼がいかにして「諸国民の父」となったか学びます。他の神々に仕えていた父の死後(ヨシ 24:2)、人生の終盤に差しかかって、また不妊ゆえ子孫を遺すことも期待できないアブラムに、主なる神は現れました。どのように真の神との認識に至ったのかは記されていませんが、受け入れることができたのは、神が彼の心の素直さを備えておられたからだと思います。認識したとはいえ、今までの備えられた生活を脱ぎ捨てて、家族にも了解を得て、目に見えない神に信頼して一歩踏み出すのは、やはりすごいことです。ノアとアブラムの共通点は、神の召しに単純に従ったこと。前途を案じて、自分にそれだけの能力があるか、自分は御心を完全に行える信仰者なのか、そうではなく、ただ主なる神を人格的に信頼して一歩を踏み出したのです。

キャンプでは多くの若者が信仰や献身の決心を告白しました。まだ生涯を主に明け渡す決心ができなくても、また神は私たちに様々な形でチャンスを与えてくださいます。辞退しようとしたのはモーセもエレミヤも同じです。大きな働きに召される時まず頭をよぎるのは、自分の能力と人格の不足です。見せかけの謙遜をもって、私たちはあらゆる方法で超自然的な神の召しから逃れようとする罪深い性質を持っています。複雑な理論よりも単純な信仰は、私たちにとって何と難しいことだろうかと思わされます。アブラムのような単純な信仰はまさに神の賜物。失敗や困難に立ち向かいつつ旅をつづけます。

どのように私たちを通して、地上のすべての民族が祝福されていくのか。時代によってユダヤ人と異邦人が福音のために、それぞれに用いられました。出身が信者の家庭か未信者の家庭か。信仰を持つのが若年の時か老年の時か。様々ですが、その人に応じて個人的に神は祝福の基とする計画をお持ちです。人生の祝福をもたらすのは神であって、他に何らかの代替手段はありません。ロトのように目に見える状況に幻惑されると、自分の利害に基づいた祝福を求めようと勝手な動きを始めます。すると次第に祝福が遠のいていきます。召されたら、どこに行くか知らずとも天の祝福に目を留めましょう(ヘブ 11:。)

8月8日

## 「賛美と感謝」

詩篇 103:1-14

長谷部 文衛 師

### ①「わがたましいよ。主をほめたたえよ。」(1節)

ダビデ王は自分の魂に向かって、主なる神を賛美するように命じています。ダビデの主に対する畏敬の念、救いの思いの大きさを、感謝を教えられます。

ダビデは申すまでもありませんが、賛美の人でありました。そればかりか、楽器をも造ったといわれています。本当に主を愛していたことが分かります。私たちは楽器まで造って、賛美しているでしょうか？ 私たちは手元にある楽器を用いることができますから、さいわいです。

私は音楽が好きで、子どもの頃はハーモニカ、青年時代はギターを独学で勉強しました。牧師になってからはオルガン、アコーディオンを用いて賛美のお手伝いをするようになり、牧会生活を離れてからもこれは続けております。

### ②「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(2節)

これは救われた私たちへのメッセージです。みなさんの好きな聖句ですが、それはその通りと合点しておられるからだと思います。感謝すべき5つは

- 、(1)「すべての咎を赦し」 = 矢印すべての罪を赦し。
- (2)「すべての病をいやし」= 今健康であることも。
- (3)滅びの穴から贖われたこと。
- (4)救いの冠をかぶらせてくださった。
- (5)主の憐れみ深いことを忘れてはならない。



8月15日

## 「平和の都」

詩篇 122:1-9

武安 宏樹 牧師

本日は敗戦から65年を迎える記念日。韓国併合からも100年になります。日本はかつて太平洋戦争において、「八紘一宇」を旗印に大東亜共栄圏としてアジア各国を蹂躪し多数の尊い生命を奪い、また開戦の代償として原爆投下の憂き目に遭いました。当時の日本基督教団は国の圧力に屈して天皇崇拝を受け入れ、さらに総督自ら韓国に出向き神社参拝、宮城遙拝を強要しました。最重要の第一戒を教会が率先して破り、戦後多くの教団は悔い改めましたが、日本キリスト教史に暗い過去を残すこととなりました。厳しい時代でした。キリスト教国は各地で十字軍はじめ、ベトナム戦争、湾岸戦争など頻発させ、「平和の町」エルサレムは皮肉にも世界の弾薬庫と呼ばれ、絶え間ないテロや小競り合いにさらされています。私たちは平和とは幻想なのかと錯覚します。

詩 122 篇には、「シャローム」が頻出します。平和の他に、相互関係の調和、健康、長寿、繁栄、勝利、救いといった意味があります。都上りの巡礼者到着の感動は目に見えるエルサレム以上に、諸部族が結合され礼拝を捧げる麗しさ、その彼方に終わりの日に天地万物が更新される、全き平和を仰いましょう。しかし私たちは再臨まで平和を諦めるのではなく、「エルサレムの平和のために祈れ」と命じられています。神は「平和の君」主イエスを送られ、現在進行形で平和の拠点としての教会を現代のエルサレムとして、展開しようとされています。主イエスは「左の頬も向けよ」(マタ 5:39)と平和づくりの主導権を握るように、私たちを召されます。M. L. キング師は13年間の公民権運動で、一度も暴力に訴えることなしに、祈りと忍耐と共に次々と勝利をものにしていきました。「それでもあなた方を愛する」の彼の言葉は、十字架上の主イエスに通じます。

「平和をつくる者は幸い」(マタ 5:9)と、主イエスは平和の能動性を語ります。利害関係、対立関係の中で調和を生み出すよう具体的努力を惜しまないこと。表面的、消極的な秩序の維持ではなく、信仰によって神の平和を得た私たちが自分の罪深い内面と和解し、家族、友人を傷つけたことを自分から謝罪し、社会的な民族、宗教間の葛藤さえも、率先して和解の糸口を見出そうとすることです。詩 72 篇には項目が列挙されています。私たちは自らの共同体に甘んじるのではなく、福音による平和の拡大のため主導権を握る使命があります。

8月22日

## 「成長する神の国」

マルコ 4:26-34

武安 宏樹 牧師

一連のたとえ話の最後ですが、33～34節には群衆にたとえを使う理由について記されています。霊的真理について弟子たちは単刀直入に説明しても、それなりの時間をかければ理解できますが、群衆には理解が難しいでしょう。主イエスは能力別教育を行う「名伯楽」であり、弟子訓練と伝道集会のように、対象に応じて使い分けました。未信者には例話で福音を語るのも効果的です。

種蒔きのたとえは前に、「道ばた、岩地、いばら、良い地」(4:1-20)と環境について語られましたが、今回は種の「成長力」にスポットが当てられています。植物の成長、特に雑草の逞しさに驚かされ、野菜の実りに喜びを感じます。成長に2つの見方ができます。1つ目は水や肥料など手間ヒマかけることで、初めて成長するという見方。2つ目は雑草の如く種が落ちれば自然に成長し、障害を取り除けば良いという見方。神の国は後者ではないかと思わされます。信じた当初はからし種ほどでも、私たちの信仰には霊的成長が期待されます。不信仰に陥ったり、病んだりしたら、妨げを除去すればまた成長し始めます。主イエスは農夫なる神が私たちに良い実を結ぶため「刈り込み」し(ヨハ 15:2)、パウロは教職者の務めを「聖徒たちを整える」(エペ 4:12)働きと定義しました。「整える」とは原語で「整骨」の意です。「高価で尊い」(イザ 43:4)私たちは全て「おのずから」(協会訳)成長するため召されたのだから、楽しみにしましょう。

個人から教会の成長へと適用は拡がります。教会成長の指標は、量か質か？難しい質問です。伸びた教会の要因も doing の次元で、一様ではありません。全ての教会は御霊の注ぎがあり、個人同様に成長が期待される種子なのです。教会を成長させるのは、あくまで神の働きであり(1コリ 3:7)、サーフィンにたとえれば、私たちは波を創出するのではなく、教会に与えられる霊の波を見出して乗ることが大事です(リック・ウォレン著「健康な教会へのかぎ」より抜粋)。祈りつつ水面下で恵みの伏線を探すのは楽しい作業です。信徒各人の中に、教会に与えられた賜物を見出す中に、成長すべき種子がたくさんあります。御言葉の種子は信じたら信じたように、やがて実を結ぶのです(イザ 55:9-11)。

8月29日

## 「向こう岸へ渡ろう」

マルコ 4:35-41

武安 宏樹 牧師

主イエスの弟子訓練は学んで終わりではなく、御言葉を実践することです。主イエスは弟子たちにガリラヤ湖向こう岸へ渡ろうとチャレンジしました。ペテロら漁師出身者は天候の恐ろしさは熟知の上でしたが、何はともあれ、彼らは言われた通り舟を漕ぎ出した。ここに彼らの信仰の資質を垣間見ます。果して突風に遭遇した舟は波にのまれて、今にも沈没しそうな状況でした。居眠りしている主イエスに向かって、弟子たちはたまたま非難してしまっただけで、群衆にはいくらでも助けるのに、自分たち側近が危機に瀕しても何もしない!身体的危険と信仰的葛藤に彼らは翻弄されていた。それが彼らの限界でした。

やがて起きあがった主イエスがされたのは、自然を叱りつけることでした。すると嵐は止まりました。その後弟子たちに「信仰の薄い者たち」(マタ 8:26)と言われた。この順番は、主イエスの目的が弟子の断罪よりも、創造と統治の主であることを知らしめる教育にあることを示します。彼らはヨナと反対に、従順の結果として試練に遭遇したからです。どのような方が認識を正されて、後に彼らは自分の認識と信仰の不足を認めて、主の御名を崇めるに至ります。

「大きな恐怖」(41節)とは過ぎ去った嵐のことではなく、非難してしまった主イエスへの聖い恐れのことです。小さな神観が打ち砕かれて未だ戸惑いの中にいる弟子たちですが、嵐の試練を通し自分の弱さと主イエスの偉大さを改めて学びました。信仰が練り清められ、一層主にお仕えするようになった。これこそ「人間をとる漁師」(1:17)になるため、己の力に頼らない訓練です。ただまっすぐに主イエスから目を離さない信仰には、苦しみを通して自分の限界を悟らなければなりません(ローマ 5:3-5)。同じく極限状態の中でヨブは、知恵と力を尽して神を問いつめました。そこで神の偉大さと愛を知った。私たちの生活にもいろんな試練があり、逃げたり小手先で対処できるものも多くあります。平穩無事で美しい信仰生活に安住したく願うのが私たちです。主イエスは「さあ、向こう岸へ!」と、苦難の中で主を崇める世界へ誘います。

9月5日

## 「解放された人」

マルコ 5:1-20

武安 宏樹 牧師

湖上の訓練に引き続き、向こう岸到着早々に日没後の静寂を引き裂いて、主イエスと弟子たち一行は、悪霊につかれた人と対峙することとなりました。世に「悪霊つき」の人は少数でしょうが、おとぎ話と看過してはなりません。私たちもかつて世の神サタンに支配下で霊的死者だったのです(エペ 2:1-3)。パウロさえ、罪のとりこにある自分の悲惨さを述懐しています(ローマ 7:23)。同様に私たちも救い難い惨めな者と自覚する人に、神は脱出の道を備えます。

悪霊は主イエスの出現に過敏な反応を示しました。それは終末の滅びの日が来たかと錯覚したからです。『出て行け!』主イエスは容赦しませんでした。「レギオン」とはローマ軍約6000人の意。彼が彼でない、分裂した精神状態を表します。悪霊の正体を暴くため、主イエスは「おまえの名は」と尋ねました。悪霊は他の者に移るのを許さないと知っていたので、豚に移るのを望んで了承されました。斯くして、豚の群れは溺れ死に、村は大騒ぎとなりました。

17,18節を対比すると、ゲラサ人と悪霊を追い出された人との反応の違いが分かります。これを神の業と受け止められなかったゲラサ人たちの対応は、主イエスに悪霊もろとも出て行けというものでした。彼らは一人の解放より、自分たちの経済的損失の方が重大で、再発で生活基盤の崩壊を恐れました。それにひきかえ、解放された彼は正気に返って座っている今の自分の基盤が、聖霊の働きであることをただちに受け入れ、同時に献身をも表明しました。自分ではない重たいものに絶えず支配され、死と滅びの恐怖に常に苛まれて、家族にも誰にも理解されずに精神は病んで、孤独な墓場生活を送っていた彼。今や悪霊と罪の鎖から完全に解放されて、心の底から喜びを体験しています。主イエスは彼に与えられた志を喜ばれたでしょうが、「郷里伝道」という別の使命を与えられました。彼の忠実な証しにより驚きは村全体に拡がりました。主イエスは「医者が必要とするのは病人」(2:17)と、私たちが罪の悲惨を認め駆け寄ることを求めておられます。悪霊、悪習慣、心の傷、赦さない心からの解放を御名によって得て、私たちが彼のように霊的解放を祈り拡げましょう。

9月12日

## 「信仰によるいやし」

マルコ 5:21-43

武安 宏樹 牧師

主イエスによる実物教育の第3弾です。構造的にはヤイロの娘の記事に、長血をわずらった女の記事が挿入され、全体の流れで見ると分かります。

### ① 会堂管理者ヤイロの懇願(21～24 節)

主イエスと弟子たちの一行が戻ってきたのを聞いて、群衆が殺到しました。彼らをかき分けて、御前にひれ伏したのがヤイロでした。会堂管理者とは、礼拝を司る要人ですが、彼は瀕死の娘のため全てを捨ててすがりつきました。私たちは聖書の吟味も大事ですが、彼のように余裕のない時は、訓練された霊的感覚が物を言います。知識だけでなく、主との人格的交わりが重要です。)

### ② 長血をわずらった女のいやし(25～34 節))

ヤイロの家に向かう途上の大混雑の中で、主イエスは明らかに他の群衆と違うタッチを受けて、力が出て行ったことに気づきました。弟子は理解不能でしたが、ご自分の霊によって気づいた。それは力強さや執拗さというより、長年の肉体的、精神的、経済的、宗教的(レビ 15:25)苦痛から救いを願う信仰が、そこに込められていたからです。罪深さを痛感しつつ、死ぬ気でタッチした。その信仰を通して手から御霊のいやしが流れ出た。純粋な彼女は隠し通せず、打ち明けたことで、主イエスから温かい励ましに満ちた完治宣言を受けた。彼女にとって、主イエスとの人格的な出会いによるいやしこそ救いでした。)

### ③ ヤイロの娘の死からのいやし(35～43 節))

女のいやしで時間を費やした最中に、ヤイロの娘の死の連絡が入りました。ヤイロはこの女を恨んだかも知れませんが、それ以上に会堂管理者として、これまで献身してきた彼の願いが届かなかった失望感に苛まれていました。「恐れなくて、ただ信じていなさい」と主イエスは彼に真の信仰を教えようと言われた。たとえ死であってもピリオドでなく、希望への通過点に過ぎぬこと。家の中は悲嘆と嘲笑に満ちていました。主イエスの呼びかけは娘を生還させ、サタンを駆逐し、歓喜と驚愕が満ち、信仰は不信仰に勝利しました。神はタイミングが悪くとも、私たちの願いを聞き遂げて救いを導かれます。娘が眠りから覚めたことは、終わりの日の復活の前味です( I テサ 4:13-14)。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。」( I コリ 15:55)とパウロは言います。信仰による奇蹟は魔術ではなく、「神の栄光のため」(ヨハ 11:4)今も起こります。

9月19日

## 「主にゆだねて」

詩篇 37:5

佐藤 紀子 師

私はクリスチャンホームに生まれ(世田谷中央教会川口三恵長老ご夫妻)、両親の信仰生活から特に3つのことを見てきました。それは、①祈ること、②礼拝厳守、③献金、でした。私がイエス様を信じたのは、ヨハネ 3:16 の御言葉から、イエス様の十字架が私のためであることがはっきりとわかり、「イエス様ごめんなさい。私の罪を赦してください。これからはイエス様を信じ、従っていきます。」と祈り、決心しました。小学6年生の夏でした。

高校生になり進路を決める時、2つの病を通され、主によって生かされていることを知り、主のために働きたいと願い、献身しました。

主人(故佐藤朝雄師)と結婚し、4つの教会(松本中央、国場=現沖縄ビクトリー、稲永キリスト=現名古屋めぐみ、大森キリスト=現愛知泉キリスト)で30年間奉仕の場が与えられ、その中で2つの会堂建設の恵みを経験させて頂き、感謝しています。1997年に主人を天に送りました。結婚30年、詩篇 62:8 の御言葉が私たちの支えであり、事有るごとに御言葉を聞いて祈ってきました。また主人が病になった時、私はローマ 8:28 の御言葉が力となり、15年間神様の最善を信じ委ねてきました。主人が召されて13年になりますが、詩篇 37:5 の御言葉を口ずさみながら、今があります。詩人は主に委ねることのすばらしさを体験したから、「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」と告白できたのだと思います。主に信頼し委ねる度合によって主は事を成し、答えて下さることを思う時、すべてを委ね最善を成して下さる主に期待して歩む毎日、人生が、私たちにとって一番平安であり、安心、安全、しあわせなのだと思います。

9月26日

## 「走るべき道のり」

Ⅱ テモテ 4:6-8

武安 宏樹 牧師

愛宕山教会は70歳以上の方が15人居られます。一概には言えないにしても、「御国に近い」方々と言えるでしょう。世の人々はあと何年生きられるのか、逆算してやりたいことをやり、家族のために遺せるものは遺そうとします。けれどもキリスト者の場合は、「御国に近いのだから生かされているうちに、～を全うしよう」と考えるべきではないでしょうか。死は終わりではなく、もっと素晴らしい天国で、復活の主イエスと同じからだに変えられるからです。

6節はテモテに5節で語ったことに対して、パウロが自らの最期について語ります。御言葉に耳を貸さぬ不信仰な時代の到来にも関わらず、福音宣教の務めを全うするようとの願いが託されています。バトンタッチしようとしたのは自らの老害を案じていたからではなく、死の足音を感じたからです。「注ぎの供え物」とは、「神酒を注ぐように自分の血が流される」との意味です。召された働きに邁進してきたパウロの無惨な最期に、テモテがつかぬかのように配慮もあったでしょうが、パウロは死を喜んで迎えようとしていた。それは戦いと苦しみに満ちた地上の働きからの解放、栄化の希望ゆえです。主イエスがゲツセマネで祈られた如く、自ら命を捧げようとしたのでした。

召されてからこれまでずっと戦い続け、走り続け、信仰を守り通してきた。競争といっても相手との勝敗でなく、神が自分に与えられた働きのことです。私たちは仕事でも勉強でも人間関係でも、目の前の戦果に一喜一憂します。けれども神が与えられた信仰のレースは、そのようなものではありません。自分の思うような人生でなくとも、無惨な死に方でも、神に与えられた生涯を「勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通し」たならば十分だと考えていました。自分の人生でなく、神が自分を通して働かれる人生だから、目に見える勝敗より、与えられた人生のマラソンを完走することが重要です。ひたすら走ったゴールの暁には、天に凱旋して勝利の冠を授けられる最高の瞬間が待っています。だから私たちは与えられた時間や賜物を地中に埋めず、残りの地上の生涯を隠居せずに走り続けようではありませんか(ヘブ 12:1)。

10月3日

## 「権威の分与」

マルコ 6:1-13

武安 宏樹 牧師

主イエスの宣教活動は福音を語り、神の子の権威を現すために御業を行い、魂の救いと神の国の拡大を図りましたが、他方で弟子の育成がありました。彼らのインターンの最後が主イエスの郷里(ナザレ?)における伝道でした。歓迎を受けるかと思いきや、驚きはカペナウム(1:21-22)同様だったものの、彼らの驚きは幼年時代や家庭環境を知っている親しさからくる軽蔑に、飲み込まれてしまった。少数の者を除いて、主イエスに「つまずいた」のでした。弟子たちにとって、なす術もない主イエスの姿を眼前にするのは衝撃でした。福音宣教とは思い通りにイケイケで進むのではない。強引な力比べや説得で、救われるのではない。郷里だけでなく、ユダヤ人全体、ひいては私たちがまで、つまずきを覚えるのが、主イエスです。前章で悪霊追い出しやいやしを得た者は、自分の大事なものを捨て去って十字架を負いました。弟子たちが派遣直前に教えられたことは、カミを捨ててただ主に信頼することだったのです。

そういうわけで郷里伝道の結果は思わしくありませんでしたが、失望落胆する間もなく、主イエスは近くの村々の伝道のために弟子を派遣されました。命じられたのは杖一本の他は基本的に何も持たぬようにという軽装でした。余分な装備や蓄えがあれば、それに従って計画を立て底をついたらおしまい。最低限ならば、自分の所有物に依り頼むのをやめて、神に信頼して祈ります。福音を伝えても、反応はいろいろです。私たちの言葉や情熱に頼るのでなく、主イエスが説き、それ以前の預言者たちも叫んできた悔い改めによる福音を、一人でも、一軒でも、一村でも多く宣べ伝えることが、彼らの使命でした。13節を見れば、最初の派遣はまずまずの結果でした。それは主イエスの郷里伝道の厳しさに気を引き締め、祈りつつ出て行き、教えられたことの忠実さを用いられたのではないか。謙虚な者がつまずくのを神は良しとされません。自分の力に依り頼む者は自分につまずきます。福音宣教は伝える側も、伝えられる側も、同じように悔い改めの思いをもって神を見上げることを要求しています。私たちは人を外面的に判断すべきでないし、逆に足元を見られることを恐れなくとも、ただ神に信頼するところに、伝道の成功があるのです。



10月10日

## 「受難と宣教」

マルコ 6:14-29

武安 宏樹 牧師

久々にパプテスマのヨハネが登場することで、唐突な感は否めませんが、主イエスの弟子たちの派遣に際して、挿入されていると考えたと自然です。ヨハネも主イエスも弟子たちも共通するのは、宣教→逮捕→死の流れです。

国主ヘロデは、ベツレヘム周辺の幼子大虐殺を行ったヘロデ大王の子です。10人の妻により15人の子を得た大王の家系全体、近親相姦に満ちていました。名誉・金・女・偶像礼拝が、王家の愛憎関係の中で渾然一体と化していました。そんなサタンの巢窟のような王家に向かい、ヨハネは律法(レビ 18:)を盾に、勇敢に斬り込みました。まさに自分の命を賭しての預言活動がわかります。語らなければ危険はないですが、預言者魂(エレ 20:9,アモ 3:8)はそれを許さない。私たちも御言葉を語るに、世の空気より霊的空気を読むことです(エペ 2:1-3)。罪人の霊の流れを操作して、肉の欲望の中に閉じ込めるのは、世の神サタン。御言葉を語るのは戦いで、私たちが悔い改めで御霊の満たしを戴くことです。

ヘロデは偶像礼拝・不品行を好みつつ、ヨハネの教えを好む「二心」(マタ 6:24)の優柔不断な者でした。奇蹟や死者の復活などの霊的興味があつたとしても、姦婦ヘロデヤの残忍な計画に飲み込まれて、世の流れに便乗する弱い者です。幼女が使いとなり、斬首される光景が事務的に記されているのが不気味です。ヨハネは罪とサタンの魔力に取り囲まれつつ、真理を叫び続けて死にました。預言者として世から受ける名誉や慰めと最期まで隔絶した、聖い生涯でした。この箇所が6章に挿入されたのは、「一粒の麦が地に落ちて」(ヨハ 12:24)弟子たちの種が蒔かれていく流れを暗示したからでしょう。たとえサタンが神の国を殲滅させようとも、蒔かれた種は途絶えることなくむしろ拡大します。暗い時代の中で、慰めといやしに満ちたメッセージもたしかに必要ですが、主イエスは「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハ 1:29)ゆえ、罪からの悔い改めなしにはヘロデのように、底の浅い優柔不断な信仰が出来上がってしまいます。罪からの悔い改めを経験し語ることで、キリスト者も教会も成長するのです。

10月17日

## 「五餅二魚」

マルコ 6:30-44

武安 宏樹 牧師

5000人の給食の記事は十字架上の出来事と共に、四福音書全てに記されており、キリスト者の信仰生活に欠くことのできない教えであると分かります。

### ① 休み返上で宣教する主イエス(30～34節)

弟子たちは最初の派遣でそれなりの成果を挙げて戻ってきましたが、霊肉共に疲労を覚えたことでしょう。主イエスは彼らに休みを与えてくださった。人間に安息は必要ですが(出 20:8)、主イエスは群衆をあわれみ、休み返上でケアされました。主を知った者は魂の平安を戴いて休むことができますが、まだ知らぬ群衆は日々のしかかる人生の難題により、平安の内に休めません。だから主イエスは働かれました。神の救いの御手は休みません(詩 121:4)。私たちが働きと休みのバランスを保つのは大事ですが、難しくもあります。働いてばかりでも、休んでばかりでも、病んでしまうからです。休みの時も、必要を示されたなら、「良きサマリヤ人」のように働くと必ず恵みを受けます。

### ② 「五餅二魚」(35～44節)

結局弟子たちも休むことはできず、主イエスに群衆の解散を提案しました。「あなたがたで～何か食べる物を上げなさい」(37節)との常識外れな逆提案を受けて彼らは啞然としましたが、意図は常識ではなく、信仰のテストでした。いいかえれば旧約聖書の事柄で(民 11:21-23)、モーセが経験したことでした。命じられたことの実現を図るために、自分の持ち分を通して計算することは、よいことです。しかしそれに終始するのではなく、どのように実行するかが、将来独り立ちしようとしている彼らに弟子たちへの課題でした。疲れると、熟慮よりもいたずらに動きがちですが、真意を受け止めて天を見上げるのが、彼らには必要とされていました。僅かなパンと魚を手にとって、主イエスが祝福の祈りを捧げると、なんとおびただしい食糧が与えられて、みなが満腹してなおも余った。みなは空腹の満たしのみならず、神の祝福に与りました。人間は常識で奇蹟について云々しますが、奇蹟は奇蹟として単純に受け止め信じる信仰が大切です。ただのショーではなく憐れみが奇蹟として結実した。さらにこの奇蹟から、御体の豊かさ、一致、殉教の伏線が拡がります(黙 5:12)。

10月24日

## 「恐れることはない」

マルコ 6:45-56

武安 宏樹 牧師

弟子たちと群衆とそれぞれの主イエスへの近づき方について見ましょう。コミットメントの強さで言えば「群衆<求道者<信徒<神学生<使徒(弟子)」となるでしょう。右の方が距離的に信仰的に、主イエスと近く居るべきです。あと一歩近づけない弟子たちと、「追っかけ」ばかりの群衆の姿とを比べつつ、私たちは両者の信仰のあり方に、自分との共通項を見い出すことでしょう。

5000人の給食で空腹を満たされ幸福感も味わった群衆は、しるしを見て、自分たちの国を建て直し、生活を向上させる、「御用達」的な神と称賛して、無理矢理連れて行こうとしました(ヨハ 6:14-15)。そこから飲み込まれるのを避けるため、主イエスは山へ祈りに、弟子たちは舟の上で休みに退きました。弟子たちは向かい風に四苦八苦しましたが、漁師の意地もあったのでしょうか。自力で必死に漕いだ。そんな彼らを助けるため、主イエスは近づかれました。神の助けを求める心を忘れていた彼らは、幽霊と錯覚し恐怖におびえました。主イエスは「心安かれ。我なり。懼るな。」(6:50 文語訳)と励まし、乗り込むと、風は止みました。同じく湖上の「突風」(4:35~)の出来事と比べると、今回は主イエス不在ながら、呼び求める信仰を試されていたことに気づかされます。弟子訓練は最初はつきっきりでも、徐々に手を離し自立させます。祈りの訓練を経て彼らは、獄中から御名により救出される奇蹟を経験します(使 12:)

弟子たちの反応としては、前回同様驚きのあまり度肝を抜かしたに過ぎず、心の深い部分に主イエスが居られるのを、人格的に信頼しきれていなかった。霊的な鈍さは群衆も弟子も大差ありません。同じ失敗を繰り返す彼らですが(8:17)、主イエスは幾度も教えと御業を通して、信仰を叩き込んでくださる。とてつもない忍耐を示されるのは、選び(1:17)に忠実であられるからです。能力は大差なくとも、弟子たちは召しに応じて生涯を委ねる決断をした故に、人生の困った時だけ求めてくる群衆より、深くコミットしてくださるのです。群衆の反応は相変わらずですが(6:53-56)、主イエスも相変わらず懇切丁寧に、いやしを施されます。それは全ての人に、ご自分を知ってほしいからです。神の愛が注がれているから私たちは地上の苦難も、終わりの日も、恐れから解放されています( Iヨハ 4:18)。群衆でなく、弟子になろうではありませんか。

10月31日

## 「神との平和」

ローマ 5:1

武安 宏樹 牧師

私たちは歴史的な神学の基盤の上に立っていますが、一番大きいのは宗教改革の時代です。第一の特色は「聖書のみ」。第二の特色は「恵みのみ」の原則、すなわち信仰義認です。この義認の恵みについて、基本ながら再確認します。

### ① 罪について(ローマ5:12)

アダムを通して世に罪が入り、神との正しい関係が壊されてしまいました。全人類は自覚せずとも罪人として生まれ、創造された神を礼拝しようとせず、誰からも教えられないのに偶像を拝み、十戒後半に列挙される罪を犯します。これらは世の中だけでなく、教会も様々な惑わしを受けます(Ⅱテモ 3:1-5)。私たちは自分の罪を悔い改めるだけでなく、世の罪とも戦わざるを得ません。

### ② 信仰によって義と認められる(ガラテヤ2:16)

罪人は「的外れ」なため、いくら善行を積んでも神の不興を買うばかりです。しかしそんな私たちのために主イエスは贖いを成し遂げ、救いの道を開いてくださいました。ただ信じるだけで、何か善行で救われたものではありません。けれども悪魔は単純に「信仰のみ」では救われないように、疑義を抱かせます。異端の教えの共通点は、さも不十分かのように別の啓示や行いを必要と騙ることです。しかし御言葉により、神の憐れみによって、信仰義認は確実です(マタ 9:13, ルカ 18:9-14)。私たちは善行を誇る卑しい思いを捨て去って、謙遜にこれを受け止めること。ルターはこの教理を「天国の門」と感動を証します。

### ③ 神との平和(ローマ5:1)

救われるための善行で平安が与えられませんが、信仰により神の子であると認められることで、私たちは自由にされます(ヨハ 8:32, ガラ 5:1-4)。頑なに約束を受け取らない人は神秘主義に陥りますが、惑わしを与えるだけです。義認による赦しの確信は結果的に行いの実を結びます(ヤコ 2:17, ガラ 5:22-23)。入信の賜物が義認とすれば、それ以降の霊的成長が聖化。聖化はじめ一切の恵みの土台は義認です(小島伊助師)。私たちのリバイバルはどこでしょうか。それは聖書に記された、あまりに基本的な事実を再確認することにあります。

11月7日

## 「内側から出るもの」

マルコ 7:1-23

武安 宏樹 牧師

### ① 心の垣根を取り払う(1～13節)

エルサレムから派遣された神学委員会関係者に、弟子が手を洗わない件で主イエスは訴えられました。「汚れ」とは衛生面ではなく、宗教的な事柄です(レビ 15章)。律法の全体を守り行うために人為的に編み出された施行細則が、「昔の人たちの言い伝え」=マニュアル、後にミシュナーと呼ばれるものです。人命が危機に瀕しても教えを死守する信仰姿勢は、奇妙に思えるものですが、それが彼らの宗教、敬虔さの基準でした。主イエスはそんな彼らに「偽善者」、つまり外見は敬虔そうでも、律法をマニュアルと置き換えた中身は不信仰と断罪した。彼らのあり方を否定する厳しさの中に、私たちの本当の信仰とは何かを考えさせられます。神は行いではなく、心の内側を計られるからです。律法主義者とは心が割礼を受けずに、うわべの行いの垣根で覆われた者です。礼拝厳守も、什一献金厳守も、忠実な奉仕も、兄弟姉妹の交わりの誠実さも、それは立派なことですが、イコール敬虔な者と定義づけることはできません。御言葉に養われないと、自分なりの神学が心の周囲に雑草の如く芽生えます。私たちは律法を行うことの無能以上に、敬虔なフリをする弱さが存在します。

### ② 内側から出るもの(14～23節)

先の論争の意味について、主イエスは弟子たちと群衆に解説されました。それは外側の汚れは大した問題ではなく、心の内側の汚れが外側を汚すとの彼らにとっては革命的に思える解釈でした。弟子たちは呆気にとられました。先達が命を賭して言い伝えを守ってきた歴史もタブーも否定したからです。弟子たちも毒されているユダヤ人世界の常識は、主イエスの目に異常でした。外側の汚れの問題など些細に思えるほど、神の目に重大なのが罪の問題です。外に出なければOKなのではなく、心の中でも罪に該当するので(マタ 5-7)、だれ一人罪を犯さずに生きることは不可能なことを、私たちは知るべきです。木を見て森を見ぬ彼らに、主イエスは律法の精神を説きました(12:29-31)。その中身は旧約律法の引用ですから、新しい事柄ではありませんが、自分を愛する罪の人生から、神と人を愛して自分を後にする意味で新しい人生です。内側を取り繕うのをやめ、取り扱いを求める時に御霊は働かれます(ローマ 12:.)。

11月14日

## 「みなすばらしい」

マルコ 7:24-37

武安 宏樹 牧師

今回は契約の中にいる者の話でしたが、今日は契約の外や片隅にいる者についてです。主イエスの愛について、一つは契約の民に対して終わりの日に至るまでの堅忍、もう一つは契約の外にいる者にも絶えず救いの門戸を開き、失われた魂を探し求める情熱です(ヨハ 10:)。後者の「外向き」の愛を学びます。

### ① 機転を利かせた愛(24～30節)

論争で消耗されたからか、主イエスはしばしの休息をとろうとされました。天然の良港であるツロで(ヨシ 19:29)、ギリシャ人の女が娘のいやしを求めてやってきました。27節は、「子どもたち＝ユダヤ人」「小犬＝異邦人」の意です。主イエスの公生涯における宣教計画は、優先順位としてユダヤ人が先でした。だから主イエスの答は、異邦人に恵みがないとか、出し惜しみしているのを意味しません。聖書で犬はあまり良い意味で使われませんが(マタ 7:6/ピリ 3:2)、「小犬」は室内用・愛玩用の意だから、神の目に家族の一員として可愛い存在。その言葉には異邦人への暖かい配慮と、機転が利いていることを思います。彼女の方も機転を利かせて「小犬でも～」と応酬しました。執拗だけでなく、頭を使う。パリサイ人の屁理屈に比べ、彼女は信仰による頓知を用いました。主イエスは彼女の信仰を見抜いていたでしょうが、敢えて突き放すことで、持てる知性や信仰をフル活用して自分から飛び込む能動性を求めたのです。

### ② 「みなすばらしい」(31～37節)

南方のデカポリス(10の都市)地方で、聾啞者が友人に運び込まれました。外界の音と遮断された彼は、孤独の苦しみの中に居たことでしょう。そんな彼に主イエスは可視的方法と激しい霊的闘いとで、耳と口をいやされました。「深く嘆息して」は、「うめきながら」(ローマ 8:23)と同じく、激情を表す語です。「エパタ」も高ぶる中で思わず発した、主イエスの地元の公用語アラム語です。ショーでなく、一対一での個人的出会いの中で信仰によるいやしを受け取る。恵みの外にいるのではと失望する心の深層に、主イエスの愛を受け取ること。「みなすばらしい」は、創造の祝福「非常によかった」を想起しますが(創 1:31)、神の目には人種も、健常者・障がい者の相違も表面的な事柄に過ぎません。「求めよ。さらば与えられん。」(マタ 7:7)私たちも体当りの信仰を学ばされます。

11月21日

## 「堅く閉じた心」

マルコ 8:1-21

武安 宏樹 牧師

### ① 4000人の給食(1~10節)

この記事は、5000人の給食(6:30-44)の単なる繰り返しではありません。今回の奇蹟は主イエスが3日間空腹状態にある群衆への憐れみが出発点で、その過程で弟子訓練がなされます。ギリシャ語に注目すると「かご」と訳された単語が異なり、異邦人が用いる「かご」であることから、群衆の中に異邦人も多く含まれていたと思われます。これまでデカポリス地方での地道な御業が、悪霊を追い出された人の証し(5:1-20)、ギリシャ人の女の信仰(7:24-30)などの伏線を通して宣教の門が開かれたことで、4000人集められたと言えます。旧約のユダヤ人から、新約の全人類への救いへと福音の拡がりを見るのです。

### ② 不信仰者の求める「しるし」(11~21節)

宣教は拡がる一方で、律法学者、パリサイ人たちの敵対も激化するばかり。「天からのしるしを見せてください」(マタ 16:1)と、主イエスをためしました。「証拠としての奇蹟」はこれまでも多く行われましたが、彼らは自分の範疇でしるしを求めるだけで霊的には目が塞がれた者です。しるしを要求するのは、悪魔的信仰です(マタ 4:1-14)。パン種とは聖書では悪の象徴として出ますが、パリサイ人のうわべの信仰による宗教的権威と、ヘロデの世的な政治権力の総体が信仰に混入し増殖する危険について弟子たちに警告します(ガラ 5:9)。しかし彼らは誤解し、解き明かしを受けてやっと理解に至ります(マタ 16:12)。

### ③ 拡がるのはどちらか？

宣教の種子がユダヤ人から異邦人に拡散する一方で、ユダヤ人の宗教的、政治的中枢からは不信仰の種子が撒き散らされようとしていた。私たちにもわずかでも罪があれば発酵して霊性が固くなり、世の価値観に流されます。最初はしるしを通して入信するでしょうが、しるしありきの信仰生活では、換言すると目に見える奉仕に終始する生活では、神との交わりが枯渇します。その背後で、目に見えない神が私たちに語りかけていることに注目すると、天から恵みが注がれていることが分かります。神に人格的に近づきましょう(ガラ 5:6)。神は私たちの必要をご存じなので全て与えられます(マタ 6:32-33)。だから不信仰でなく、天の御国のパン種(マタ 13:33)の拡大を求めましょう。

11月28日

## 「モーセの預言に見るキリスト」

申命記 6:1-25

武安 宏樹 牧師

「わたしたちの最高の預言者また教師として、わたしたちの贖いに関する神の隠された熟慮と御意志とを、余すところなくわたしたちに啓示し〜」(ハイデルベルク信仰問答 31)

キリストの性質については、「100%神で 100%人」の「二性一人格」ですが、職務については、「預言者・祭司・王」の三職です。今日は第一弾「預言者」です。旧約時代の偉人たちは、来るべきキリストの救いを指し示す予型でした。預言者とは「予」でなく「預」と書くところから、予見者よりも代言者の性格があります。語られたことばは、全能の神の御手にあって残らず実現します。神のスポークスマンとして、預言者モーセの生涯からキリストを概観します。

### ① モーセの預言者生涯

「モーセ」の名は嬰兒期に水の中から引き出されたことで、命名されました。それは主イエスがヘロデの魔の手から免れて誕生したのによく似ています。エジプトとミデヤンでの各 40 年を経て、80 歳で民をエジプトの束縛から導き出す召しを受けました。辞退を試みた彼に、神は「わたしは主」であることを明らかにし、「不変」「共存」「遂行」の約束をされました。10 の災害と過越の後、神が追いつがる敵軍から紅海を開いて、民を救出される奇蹟を体験しました(出 14:)。シナイ山の律法授与で彼の預言者としての働きは終わることなく、金の子牛(出 32:)やカデシュ・バルネアでの意気阻喪(民 14:)で、38 年の荒野生活を余儀なくされました。荒野は民が律法を守り行うため教育・訓練期間でした。彼は遺訓である申命記にて、神を愛し律法に従う幸いについて記しました。苦しみつつ主に従い、来るべきキリストの祝福を待望しつつ世を去りました。

### ② 最高の預言者・教師である主イエス・キリスト

主イエスの地上での預言者としての職務は、①ユダヤ人伝道、②弟子への宣教、③昇天後に聖霊の働きによる 12 弟子への訓練と宣教、の3つでした。現在は①聖書の御言葉、②聖霊の働き、を通して真理の理解に導かれます。人としてはモーセの苦闘に共感しつつ、キリストの勝利の確信から私たちは成長します。終わりの時代の中で伝道の進展のために、信徒教育が必要です。「わたしはある」方をもっと知ることによって真理と希望とを受け取ります(ヨハ 14:)。



12月5日

## 「大祭司キリスト」

ヘブル 9:11-28

武安 宏樹 牧師

「わたしたちの唯一の大祭司として、御自分の体による唯一の犠牲によってわたしたちを贖い、御父の御前で私たちのために絶えず執り成し、」(ハイデルベルク信仰問答 31)

### ① 不完全な旧約時代の贖い

旧約聖書で、神の前に祭壇を築いて犠牲をささげる礼拝は、アブラハム・イサク・ヤコブなど族長たちも行いましたが、アロンとレビ族が祭司の草分けと言えます。聖所建設の第一目的は、主がイスラエルの民の中に住まわれるためでした。幕屋の中心が聖所、その中で垂れ幕を隔てた 1/3 が契約(あかし)の箱の置かれた至聖所です。中に入れるのは、年1回大祭司が民の罪の贖いのため犠牲をささげる時だけでした。この時に民は幕屋の庭の入口にて、大祭司が無事帰還し犠牲が受け入れられることを千秋の思いで待っていました。このような毎年の儀式で外面の罪はきよめられても、私たちの心の内は依然として神から遠く離れていたり、苦悩に満ちていたりします。けれども「いのちとして贖いをするのは血」(レビ 17:11)、動物の犠牲は即物的、代理的でしたが、儀式以上に来るべきキリストの十字架上の犠牲を示す意義がありました。新約の恵みに生きる私たちは、週毎に畏れの欠けた礼拝をしてはいないでしょうか。赦された罪と流された血の大きさを思わずして、霊と真理の礼拝は捧げられません。復活の瞬間に垂れ幕が裂かれて(マタ 27:51)、交わりを赦された恵みを感謝しましょう。

### ② 大祭司キリスト

12節の「やぎと子牛の血」「ご自分の血」につづく「よって」は原語が異なり、前者は「携えて」、後者は「よって」の意です。主イエスはご自身を捧げられた点が違います。その犠牲の完全性&完結性によって、父なる神は満足されました。「遺言＝契約」と脚注にあるように、キリストの死によって信じる私たちに契約の効力が発生します。この血は完全であるがゆえ、私たちの過去、現在、将来の罪の贖いが成されました。私たちは罪の咎や繰り返しへの恐れから、身代りの犠牲により自由とされています。神学者はこの犠牲の特徴を「自由意志」「自発性」「意志性」「道徳性」の4つ挙げました。ここに神の愛があります(Ⅰヨハ 4:)。私たちの死んだ行いだけでなく腐敗した心さえ、キリストの血できよめられ、神との新たな交わりと将来の希望が与えられるのです。私たちは旧約に優る完全な贖いを信じているならば、もっとキリスト中心の生活が求められているし可能です。私たちも祭司とされつつ感謝しましょう(Ⅰペテ 2:5,9)。

12月12日

## 「一つとなる」

エペソ 4:1-16

山本 多恵 師

「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」(3節)

教会の一致は非常に重要です。教会はキリストの体であり、私たちはその各器官なので、一致していなかったら困ります。むしろ、一致しているのが当たり前、健全な体なのです。では、上の御言葉をどのように実行したらよいのでしょうか。

### ① お互いの違いにではなく、共通点に注目すること

「私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。」(ロマ 14:19)とパウロは勧めます。私たちはみな、神の恵みによって救われて「新しい人になった」部分に目をとめましょう。争いがあることは、多くの場合、焦点が重要でないものにずれてしまっている証拠です(Ⅱテモ 2:23-26)。分裂はいつでも、私たちが個性、行動、解釈、スタイルや方法に注目するときに起ります。しかしお互いを愛することや神の目的を達成することに集中していると、その結果として調和が生まれるのです(Ⅰコリ 1:10)。

### ② 批判するのではなく、励ますこと

神様は他の人を批判すること、人と比較すること、人を裁くことについて、繰り返し私たちに警告を与えておられます(ロマ 14:4,10)。私たちがもし、他のクリスチャンとぶつかることがあっても、その人たちは本当の敵ではないことをよく思い出しましょう。私たちは同じ仲間、同じチーム、同じ家族です。

### ③ あなたの牧師やリーダーたちを支えること

完全なリーダーはいません。しかし、神様は教会の一致を保つための責任と権威を、その教会のリーダーにお与えになりました(ヘブ 13:17)。牧師たちはいつか神の御前に立たされ、その監督責任が問われます。しかし、私たちにもその責任の一端があります。あなたは、指導者に従ったかどうかについて神様に説明を求められるのです。「指導する」という形で私たちに仕えてくださっているリーダーたちに敬意を払うとき、私たちは教会の交わりを守ることとなります(Ⅰテサ 5:12-13)。

12月19日

## 「王なるキリスト」

Ⅱサムエル7:8-17

武安 宏樹 牧師

「わたしたちの永遠の王として、御自分の言葉と霊とによってわたしたちを治め、獲得なさった贖いのもとにわたしたちを守り保ってくださいなのです。」

(ハイデルベルク信仰問答 31)

### ① しもべであり王であるダビデ

キリスト同様にダビデも羊飼いおよびサウル王の家来として、長く下積み期間がありました。羊飼いは忍耐、勇気、状況判断を要する仕事です(ヨハ 10:)。羊を守るために狂暴な相手と対峙するには、主の御名を呼び求めて救われることを学ばされました。彼は自分の仕事に忠実に励みました(Ⅰサム 22:14)。功績ゆえに出世したことでサウルに疑惑の目を向けられ、迫害されましたが、驕らず、裏切らず主君に敬意を払い続け、死を心から悼みました(Ⅱサム 1:)。全イスラエルの王として即位後は、周辺諸部族を征服し王権は拡張しました。ダビデはバテ・シェバ事件(Ⅱサム 11:)などの罪や失敗も多く経験しましたが、過ちを認めて神の前に出ることを躊躇しませんでした(詩 51:)。能力以上に、神を愛して謙遜に生きるしもべとしての姿を神は喜ばれ、子孫祝福の契約を結ばれました(Ⅱサム 7:)。王として頂点を極めても神のしもべでありつづける。低くなる彼が高くされる姿からキリストを見ることができます(ピリ 2:6-11)。

### ② 王の王であるキリスト

福音書(マタ 1:)およびパウロ書簡の最初に、ダビデの子孫としてキリストがお生まれになったことが記されています。偉大な王また信仰者として旧約史に足跡を残したダビデの生涯から、王なるキリストを展望したいと思います。両者の違いは、ダビデは100%人間に過ぎないが、キリストは100%神であり人間であることです。キリストは王座を地上の30余年だけでなく、前も後もとこしえまで占めておられます。キリストは人間の弱さを熟知されましたが、ダビデのように罪を犯すことは皆無でした。全能の御手で時間も空間も超え、今も統治され、世の終わりの再臨の時には暗やみの支配から人々を救出し、私たちは為政者の手によらず、キリストの直接支配の至福を味わうのです。それまで私たちは世の混沌の中に置かれますが、天に坐す王の王キリストにとりなしを請う特権が与えられているし、また行使すべきです(Ⅰテモ 2:1-2)。御手の下で生起する世の諸問題に、私たちがどれだけ福音を伝えていくか、「破れ口」に立とうとしているか。熱心かつ柔軟な奉仕が求められています。

12月26日

## 「幼子キリスト」

ルカ 2:39-40

武安 宏樹 牧師

### ① サムエルの成長 (I サムエル1～3章)

母ハンナは不妊の女でしたが、一心不乱な信仰の祈りを通して、神はその胎を開かれました。サムエルは誕生の時から神の御手が関わっていたのです。男女の営みによって子どもが生まれる以上に、信仰の子は胎内に居る時から、熱心に待ち望む祈りを通して、神の介入の必要を教えられます。サムエルは両親にとって、自分の子であると同時に自分の子ではない。神のものであると意識させられます。献児式に多用される「この子を主に御渡しいたします」(1:28)は神に貸し出すという意味で、貸し主と借り主双方が気にかけている様子が伝わります。神に捧げつつも親として委ねられた養育義務があります。この献児式は夫婦揃ってなされた美しいものです。幼いサムエルの養育に、私たちは「神・子・両親」の三位一体の図式を、見ることができると思います。世の健全な家庭は、両親と子が一体となっていますが、聖書的な家庭には、神が介入されます。彼は後に養親エリの庇護の下にありながら、霊的に自立していきます。私たちも子どもたちが親以上に神に従順であることを励まし、時に子を通して神に示された罪にも、謙遜に悔い改める者とされましょう。

### ② キリストの成長 (ルカ2:39～52)

両者を比べると、出産の奇跡的背景や霊的成長が神の恵みの下でなされた点が似ています。決定的な違いは、「神の被造物」か「神」であるかの違いです。キリストには神から離れる可能性はゼロで、厳密に言えば「霊的成長」はないこととなります。過越祭からの帰路ではぐれた両親と再会した際の返答は、ぶしつけにも思えますが、ご自分が父なる神の子であることを証しました。神の子たる身分をただ主張されるのではなく、肉の親にも謙遜に仕えられたことがキリストの特徴です。だからサムエルの「三位一体」の図式ではなく、「神&子→両親(世)」の図式でへりくだられて、成長されたことが分かります。私たちはサムエルのように、子どもがキリストの弟子として成長できるよう、励ましたいと思います。それだけでなく、キリストのように神の子としてのアイデンティティを共有したいと思います。そうでないと人生経験の多少で子どもを見下します。幼児も神の子として私たち以上に用いられるのを夢見ましょう。